お義兄ちゃんとよばないでっ！

EAST

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。

この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
お義兄ちゃんとよばないでっ！

【Ｎコード】
Ｎ６２５９Ｙ

【作者名】
ＥＡＳＴ

【あらすじ】
某社の新人賞向けの原稿を期限限定で公開いたします。
主人公露木悠斗は一ヶ月半の懊悩の後、ヒロイン櫻井雛子に告白する。答えはＯＫ！　喜ぶ悠斗だったが、彼の父の再婚相手というのが……。

月末に削除いたします。よろしければご意見ご感想などいただけますと幸いです。

プロローグ　――恋人たちの季節――（前書き）

プロローグ部分をお送りします。本日はこの他、第一章の1を公開します。
それではどうぞ！

プロローグ　――恋人たちの季節――

放課後の体育館裏。陽の光の届かない薄暗い空間に、少年と少女が立っていた。少年は詰め襟の、少女はブレザーの制服を着ている。この体育館のある仁正（じんせい）学園の生徒だ。

少年は目を血走らせ、鼻の穴を膨らませ、今にも少女に飛びかかるのではないかというようなオーラを纏っていた。

それに対し、少女の方はふんわりとした髪の毛と、少々地味ではあるが小ぶりな顔につぶらな瞳、桜の花びらを思わせる唇に、少し低いが可愛らしい形の鼻と、一応美少女にカテゴライズされても良い容姿の持ち主だ。

少年は焦っていた。考えに考え抜いた作戦だったはずだ。だが、どうしてもそれを実行に移せない。いざ少女を目の前にすると、それまでの自信が音をたてて崩れ去ってしまうのだ。

少女の瞳が自分の目を見つめるとき、少年は自分の煩悩まで見透かされているような、そんな気がしてならなかった。

「あの……先輩？　お話って何なんですか？」

しっとりと湿った唇から、少女の問いかけが紡がれる。当たり前だ。自分の方から下駄箱に手紙を入れて呼び出しておいて、すでに一五分はこの膠着状態が続いているのだ。

少年――露木悠斗（つゆき ゆうと）は焦っていた。早く事態を打開しなければならない。

だが、そんな度胸があれば最初からこんなぐだぐだな展開にはなっていないはずなのだ。入学式のとき、新入生のなかから偶然見つけた一輪の花。それが彼女だ。その花を自分のものにしたい。悠斗はこの一ヶ月半の間、悩みに悩み、そして今に至るのである。

少女――櫻井雛子（さくらい ひなこ）――が悠斗の顔を下から覗き込んでくる。あまりにも無防備なその表情に、悠斗の心臓は悲鳴を上げていた。これ以上は無理だと。はやくこの苦しみから解放してくれと。

悠斗はぐっと両手を拳にして白くなるほど握りしめ、歯を食いしばった。固く目をつぶり、一度下を向く。次の瞬間、悠斗は天を仰ぐと、大きく息を吸って、自分の思いの丈を雛子に叩きつけた。

「櫻井雛子さん！　入学式で見たときからずっと好きでした！　お、お、お、俺と付き合って下さいっ！！　お願いしますッ！！」

悠斗はブンっと音がしそうな勢いで頭を下げた。腰は直角。最敬礼と言うヤツだ。悠斗は再び目を固く閉じ、歯を食いしばって時がたつのに耐えていた。

もしも答えがＮＯだったら？　いや、自分のような非モテなんかに告白されて、雛子は困っているのではないか？

永遠にも思える数秒間が過ぎた。暑くもないのに顔が熱い。汗がダラダラでて、悠斗の頬を伝って地面に染みを作る。やはりダメだったかと悠斗が諦めかけたその瞬間、鈴を鳴らすような少女の声が悠斗の頭上から降ってきた。

「先輩……お顔をあげて下さい……」

その声に、悠斗は怖々といった様子で目を開ける。目の前には雑草が茂った地面と、雛子の可愛らしい膝小僧が見えていた。雛子は膝と膝をすりあわせるようにもじもじと動かしている。

悠斗は思い切って顔をあげた。今まで頭上にあった雛子の顔が、一気に自分の胸元あたりの高さになってしまう。

「先輩……、なんでわたしなんですか？　もっと可愛い女の子、たくさんいるのに、どうしてわたしなんですか？」

雛子は悠斗の目をじっと見たまま、問いかける。激しくではなく、あくまでも静かに。でも、その言葉には嘘を許さないという確固たる信念が滲んでいた。

悠斗はもう一度大きく息を吸い込むと、自分の思い付くままを言葉にした。それしか悠斗には出来そうになかった。

「俺は……俺は今までずっとモテないし冴えないヤツだった。だから、こんな事いったら櫻井さんが困るかもしれないって、そう思ってひと月半も悩みに悩んだ。友達にも相談しないで、一人で部屋で

悶々と悩んだんだ。でも、どう気を紛らわそうとしても、どう自分を誤魔化そうとしても、やっぱり俺は櫻井さんが好きなんだ。これは俺の我が侭かもしれない、でも、俺は、櫻井さんにずっとそばにいて欲しいんだ！」

悠斗の言葉が続くにつれ、雛子の瞳が潤みはじめる。目の縁に光るものがたまりはじめ、やがてそれはつうっと一筋の線となって頬を伝った。

悠斗は自分がとてつもなく恥ずかしい言葉を連発してしまったことに気付き、頭を抱えてのたうち回りたい気分だった。だが、今言った言葉には微塵の嘘も含まれてはいない。全ては自分の本心だった。

「先輩……ありがとう……ございますっ。わたし、本当に嬉しいです」

「えっ？」

「わたしも、先輩のこと、ずっと見てました。先輩が校舎裏で仔猫に餌をあげてるのを見てから、ずっと……」

ずっと、見ていた？　自分の事を？　悠斗の心臓がどくんと跳ねる。もしかして……もしかしてこれは……。

「先輩、わたしも先輩が大好きです。ずっと一緒にいられたらいいなって、そう思ってました。でも、わたしって地味だし、可愛くないし、取り柄もないし、全然自分に自信がなくて、だから自分からは言えなくて……。呼び出してくれたのが先輩だと分かった時は、心臓が破裂しちゃうんじゃないかって思うほどでした」

訥々と語る雛子の言葉が、静かな旋律となって悠斗の耳に届く。その旋律は悠斗の鼓膜を振動させ、聴覚神経を刺激し、脳に情報を届けている。「この子も自分の事を想ってくれている」と。だが、悠斗には一つだけ許せないことがあった。それは、雛子があまりに卑屈になっていることだ。まあ、それは悠斗も人のことを言えた義理ではないのだが。

「先輩……本当にわたしなんかでいいんですか？」

「櫻井さん、そんなに卑屈になるなよ。そんなことといったら、俺だって今まで散々非モテだのキモイだの言われてきたヤツなんだし。それに、俺の目には櫻井さんが誰よりも可愛く見えるんだ。これは嘘じゃない、本当の事だぞ！」
悠斗はそこまで一気に言うと、ふうっと息をついた。
「俺だって、君を呼び出すだけ呼び出しておいて、こんなに待たせるようなヘタレ男なんだ。幻滅したんじゃないか？　ああ、こんなヘタレだったんだ、って」
「そんなことありませんっ！」
雛子がその身体に似合わない大きな声を出した。自分を卑下する言葉を連発していた悠斗は口をつぐむ。
「先輩は、先輩はヘタレなんかじゃありません。とっても優しいひとです……」
「櫻井さん……」
「わたし、決めました！　わたしは、先輩のそばにいます。ずっとです！」
胸の前でぎゅっと拳を握り、上目遣いに悠斗を見つめる雛子の瞳には、固い決意の色が滲んでいた。
「……わかった。俺もずっとそばにいる。ずっと、ずっとだ」
悠斗がそっと雛子の肩に手を回す。雛子もそれに応じて悠斗の首に腕を回す。二人の顔が次第に近づいて行き、やがて静かに唇が触れあった。ほんの微かに触れるだけの接吻。だが、それは二人にとってなによりも大切な儀式だった。
「先輩……」
「なに？　櫻井さん」
「雛子って呼んで下さい」
「ん……じゃあ、雛子」
「わたし、先輩みたいなおにいちゃんがずっと欲しかったんです。先輩のこと、おにいちゃんって呼んでいいですか？」
悠斗は嬉し恥ずかしさにその場でもんどり打って体育館の壁に頭

突きを連打したい衝動に駆られたが、すんでの所で理性がブレーキをかけてくれた。
「お、俺でよければ、いくらでもおにいちゃんって呼んでくれ！」
「嬉しいっ、おにいちゃん！」
僅かに見える空の色は夜の闇が近づいてきていることを示している。だが、二人には時間の経過など些細なことにすぎなかった。
この日、放課後の体育館裏のほんの僅かの空間。それが恋人たちの永遠の愛の誓いの場となった。

プロローグ　――恋人たちの季節――（後書き）

いかがでしたか？　よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第一章　――恋人が妹！？――　1（前書き）

第一章の1をお送りします。それではどうぞ！

第一章　――恋人が妹！？――　1

露木悠斗は、一言で言えば冴えない高校生だった。背はまあまあ高いが、取り立てて顔がいいわけでも、成績がいいわけでもない。クラスの女子連中からは『安全パイ』扱いされているし、友達連中もモテない奴らばかりだ。

だが、その悠斗に彼女が出来た。それも、地味めではあるものの、控えめに言っても可愛らしい新入生だ。悠斗はその事実を噛みしめながら、夕食の支度をするためにキッチンに立っていた。

「おっと、アクはちゃんと捨てないとな。これがあると味が濁るんだ」

悠斗には母がいない。幼い頃、大病を患い、あっけなく死んでしまった。まだ物心つくかつかないかのころだったので、悠斗には母の思い出らしいものはほとんど無い。ただ鮮烈に覚えているのは、暖かくて、柔らかくて、いい匂いがする、ということだった。

「そういや、櫻井さ……雛子も、暖かくて、柔らかくて、いい匂いがしたなぁ。女の子はみんなああなのか？」

雛子の身体を抱き留めた時の感触が、悠斗の脳裏に蘇る。華奢に見えて良く育った胸や、ほっそりした手脚。髪の毛から香るシャンプーの甘い匂い。どれを取っても悠斗の煩悩を刺激しまくりだった。これ以上ないくらいだらけた表情で妄想世界の住人になっていた悠斗は、鍋が吹きこぼれそうになってやっと我に返った。危ない危ない。

「カレーは大辛。これも親父殿の指示だ。従うしかあるまい」

本当は自分は中辛くらいが好きなのだが、露木家の大黒柱にして絶対権力者である父に逆らうことなど、悠斗には思いもよらないことだった。現に、逆らおうとして児童虐待寸前のお仕置きを何度されたことか。

だが、それ以外は悠斗の父は良き家庭人だった。夏休みや冬休み

には長期休暇を取って、悠斗を遊びに連れ出した。おかげで母がいないということで寂しい思いをすることはほとんど無かった。
大辛のカレールーを鍋に放り込みながら、悠斗は雛子とのこれからのことを思い浮かべる。今日は舞い上がっていて、ケータイの番号やメアドの交換すら忘れていた。明日は土曜日で学校は休み。となると、次に逢えるのは月曜日と言うことになる。
「今度は絶対抜かりなくいくぜ！　きっと今ごろ雛子も寂しい思いをしてるに違いない！　不甲斐ないおにいちゃんをゆるしておくれ！」
火をとろ火にして煮込む体勢に入ると、悠斗はキッチンを離れ、二階の自室に上がっていった。そこには、写真部の部員から買った雛子の盗撮写真がフォトフレームに入って机の上に立てられていた。
「やっぱかわいいよな、雛子……。自分の可愛さに気づいてない辺りが余計に可愛いぜ」
悠斗はフォトフレームを胸に抱えると、ベッドにどさりと倒れ込み、ごろごろと転げ回った。
「あああああ～～～～っ！　雛子を押し倒してあんなことやこんなことをしたい！　両思いだから許されるよな？　フフン、思い知れ非モテども。俺はすでに貴様らとは違う人種にジョブチェンジしたのだ！　悔しかったら雛子より可愛い彼女を作ってみろってんだ！」
メチャクチャである。だが、本人は煩悩にまみれたその愛情に一片の疑いも抱いていなかった。自分が煩悩まみれだということを、十分過ぎるほどに知っていたからだ。
「雛子～～っ、ちゅっ」
最後にフォトフレームの写真にキスをすると、悠斗はそれを机に戻し、スキップするようにして階段を下りていき、途中で転んで一階まで滑り落ちた。
「いって――――！　くそっ、せっかくいい気分だったのに。縁起でもない」
キッチンへと戻り、カレーの煮込み具合を確認。良い感じに仕上

がっている。これならカレーにうるさい悠斗の父でも文句は言わないだろう。鍋を数回掻き回して、焦げていないかをチェック。大丈夫。この火加減なら焦げることはない。
　その時、玄関の鍵を開ける音が悠斗の鼓膜をふるわせた。時計を見ると、午後八時三〇分。父の帰還である。
「ただいまー。お？　今日はカレーか。いい香りだな！」
　悠斗の父、露木悠大（ゆうだい）は、居間のソファーに鞄を放り出すように置くと、ネクタイを緩めた。悠斗の目から見ても、大人の男という感じのする所作で、自分も社会人になったらあんな風になりたいと密かに思っていた。ただ、社会人になる、ということが一体どういうことなのかは、まだ悠斗には理解出来ないでいたが。
「どれ、ちょっと味見させろ。うん、このくらいの辛さが丁度いいんだ。悠斗、また腕を上げたな？」
「市販のルーにちょっと隠し味を入れてるだけだよ。腕もくそもあったもんじゃないさ」
「謙遜しなくてもいい。世の中には市販のカレールーを使ってもカレーを作れないヤツもいる。まあ、それが父さんなんだがな」
　はっはっはと大口を開けて笑う悠大。実際、食事といえば幼い頃は家政婦さんが作ってくれたものばかりだった。職場では部下を何人も抱えてバリバリと仕事をこなす悠大の、唯一苦手とするのが料理だったのだ。
「まあいいよ。風呂先に入る？　飯の方が先？」
「そうだな、まずは飯だ」
「了解」
　炊飯器にはすでに炊きあがったご飯がスタンバイしている。カレー皿を持った悠斗が炊飯器の蓋を開けると、つやつやのご飯が姿を現した。魚沼産のコシヒカリの味を損なわないように、天然水で炊いたご飯だ。それをたっぷりとカレー皿に盛る。
　続いてしっかりと煮込まれた大辛カレーをご飯の上からかける。悠大は普段はそれほど大食漢というわけではないが、ことカレーに

なるとそこらの大食いチャンプ並みに食べるのだ。
「はい、お待たせ」
すでにスーツを脱いで部屋着に着替えた悠大が、ダイニングテーブルの定位置に陣取っていた。だが、すぐにはカレーに手をつけない。露木家では、余程のことがない限り、親子揃って夕食を食べることになっているのだ。悠斗が自分の分のカレーをよそって、自分の席に着く。それを待っていた悠大が、両手を合わせた。悠斗も同じように手を合わせる。
『いただきます』
スプーンでカレーとご飯を掬って、口まで運ぶ。その作業すらもどかしいと言わんばかりに、悠大は食べる。だが、その日の悠大はいつもよりさらに嬉しそうにカレーを頬張っていた。
「ねえ、父さん、もしかしてなにか良いことでもあった？」
「ん？　んー、やっぱり分かるか？　それより、お前の方こそなにかいいことがあったって顔してるぞ？」
「まあ、学校でちょっとね。それより、父さんのいいことってなにさ」
「それはちょっと内緒だな。ああそうそう。悠斗、お前日曜日は空いてるか？」
「空いてるけど、なんで？」
「久々に山の森林公園に行こうと思ってな」
「なんだよ、いきなり。それなら何か弁当でも作っていくかな」
「いや、その必要はない」
悠大は満面の笑みで言った。
「とにかく、日曜日は開けておけ。これは父さんからの命令だぞ」
「ハイハイ……」
「ハイは一回だ！」
「は～い」

＊＊＊

二日後、日曜日は朝から快晴だった。黄砂も降っていないし、森林浴には格好の天気だ。悠斗は朝七時に起きて朝食の準備をしていた。普通の高校二年生なら「なんで俺が飯なんか作らなきゃいけないんだよ」とやさぐれるところだろうが、悠斗はちょっと違う。小学生のころに家政婦さんから料理の手ほどきを受けて以来、自分で食事を作ることがたのしくて仕方がないのだ。

今日のメニューはベーコンエッグとトーストとサラダ、それにネルドリップのコーヒー。ベーコンをカリカリに仕上げるのが悠斗流のこだわりポイントだ。食事が出来上がる頃に、悠大が寝室から一階へと降りてくる。

「おはよう、父さん」

「おお、おはよう、悠斗。今日はベーコンエッグか」

「そろそろ起きてくると思って用意してたんだ。今コーヒーを入れるから、座って待ってて」

「ん……。っと、その前に新聞新聞っと」

悠大は外資系の商社に勤めるサラリーマンだ。新聞も一般紙の他に、別に経済専門紙を取っている。経済紙を斜め読みしながら、悠大は世間話でもするかのような気楽さで口を開いた。

「なあ、悠斗。もしもな、父さんが再婚するっていったら、お前はどうする？」

入れ立てのコーヒーを悠大の前に置きながら、悠斗は特に関心もないと言った風に答えた。

「別に、いいんじゃない？」

「なんだ、それだけか？」

悠斗はてきぱきと朝食の準備をしながら父の問いに答える。

「それは父さんが決めることであって、俺がとやかくいうことじゃない。父さんがそうしたいならそうすればいいよ。……まてよ？父さんが再婚したら、義母さんが出来るのか。家事とか楽になりそうだな。んで、なんでそんなこと聞くのさ？」

「いや、聞いてみただけだ。特に意味はない」
朝食の支度を終えた悠斗がテーブルに着く。新聞を読んでいた悠大が、それを机の脇に置く。いつも通りの休日の朝食。いつもとかわらない日曜日。
少なくとも、悠斗はそのときはそう思っていた。

＊＊＊

「さて、そろそろ出発するか！」
時刻は午前九時。森林公園までは徒歩でも行けるが、今日はバスを使うので、バスの時間を考えなければならない。バス停までは歩いて数分だから、確かにもうそろそろ出発しなければならない時間だった。
悠斗はトレッキングシューズに足を突っ込みながら、腕時計を確認する。大丈夫、時間の余裕はある。その日の悠斗の出で立ちは、カーゴパンツに黒のプリントTシャツ、上に長袖のシャツを重ねて着ている。どうみてもユニ●ロで全部揃えました感が満点だ。
それに対して悠大の方はチノパンにブランドもののポロシャツ。腕には結構高い腕時計。シンプルだけど締まって見えるコーディネイトだった。父親に対して何とも言えない敗北感を抱きながら、悠斗は靴紐を締める。
「よし、じゃあ行こう。しかし久しぶりだな、悠斗とこうして日曜日に出かけるのも」
「高校生になって父親と仲良く森林公園へ行くヤツの方が少ないよ」
「まあ、そう言うな。今日はちょっとしたサプライズを用意してるんだ」
門扉を開いて家の前の通りに出る。バス通りまではほんの数分。バスもちょうどその頃に来るはずだった。
「そうそう、父さん。俺にもついに彼女が出来たよ」
「ほう！　お前みたいな野暮ったいヤツを好きになってくれる物好

きな女の子もいたのか！」
　悠斗は肩をがっくりと落とした。悠大は時々悠斗が自分の遺伝子を受け継いでいるということを忘れているような発言をする。このときがまさにそれだった。
「まあ、野暮ったいのは確かだけどさ。ついに俺にも春が来たんだよ！　それがまた可愛い子でさ！　一つ下の新入生なんだ」
「ふむ。つまり新入生なのをいいことに、自分のヘタレぶりを隠し通したんだな？　なるほど、それなら納得出来る」
「ひっでーなー。素直に息子に彼女が出来たことを喜んでくれてもいいじゃないか」
　悠大は空を仰ぐと大口を開けてはっはっはと笑った。
「喜んでるさ。だがな、お前はまだ高校生だ。節度をもった付き合い方をするんだぞ？」
　そんな話をしていると、森林公園行きのバスがガタゴトと走ってきた。森林公園に向かうバスの路線はもう一路線、街の反対側を循環してくるものがある。このバスは『東部循環系森林公園前行き』という札が出ている。つまりは街の東側から森林公園へと向かうバスだ。お察しの通り、もう一本の路線は『西部循環系』である。
　後部のドアからバスに乗り込み、露木親子はドアのすぐ後の席に並んで座った。五月のうららかな陽射しが、悠斗を眠りへと誘う。やがて、悠斗は軽い寝息を立てて浅い眠りへと落ちていった。

「悠斗、悠斗。終点だ。着いたぞ」
　遠くから父の呼ぶ声がする。終点だって？　何の話だ？　悠斗はまだ目覚めきらない脳みそに無理やり覚醒を命じて目を開いた。一瞬、陽の光で視界が真っ白に染まる。明るさに慣れると、窓の外には森林公園の入り口と、バス停の屋根が見えていた。
「やっと起きたか。ほら、運転手さんの迷惑になる。さっさと降りるぞ」
「う、うん」

悠大は先頭に立ってさっさと二人分の乗車料金を払って降りてしまう。悠斗は慌てて後を追おうとするが、デイパックの肩紐が座席の手すりに絡まって美味く取れない。運転手に平身低頭してバスを降りるまでには結構な時間を要した。
「遅い！　これが女性相手の待ち合わせだったら平謝りしなきゃならんところだな」
「そうは言ってもさ、この肩紐が」
「言い訳は男らしくないな。ふむ、時間は丁度いいか」
悠大は見るからに高級そうでいて、渋いデザインの腕時計で時間を確かめる。一々所作がダンディなのが悔しくて、悠斗は悠大から目を逸らしていた。と、坂の下から一台のバスが上ってくるのがみえる。街の西側を廻ってくるバスだろう。それにしても、なぜ悠大は森林公園に入場しようとしないのだろう。そんなことを考えていると、西部循環のバスは目の前のバス停にゆっくりとその車体を停めた。
乗客が降りてくる。結構な数だ。大体は家族連れだが、悠斗はその中に見知った顔を見つけていた。あれは、あのふわふわの髪は！
「雛子！」
突然自分の名前を呼ばれた雛子は、キョロキョロと周囲を見まわし、悠斗が自分の方へと駆けてくるのを見つけた。
「おにいちゃん！？」
「偶然だなぁ。こんな所で雛子に会えるなんて、今日はツイてるな、俺」
「もう、他の人が見てるよ？　恥ずかしいよぉ」
「恥ずかしがることないだろ？　俺と雛子の仲じゃないか」
その時、静かで、上品な印象の女性の声が悠斗の耳朶を打った。
「そう……あなたが悠斗くんね。雛子の『おにいちゃん』の」
その声に悠斗が振り返ると、そこには雛子をぐっと大人っぽくしたような美人が立っていた。
服は上品なワンピースにボトムスの重ね着。嫌みでない程度にア

クセサリーをつけて、薄化粧をしている。
「もしかして……お母さんですか？　雛子……さんの」
「そうです。櫻井都子（みやこ）と言います。雛子の母で――」
悠斗はその言葉に続いた悠大の声に凍り付いた。
「――悠斗、お前のお母さんになる女性だ」

第一章　――恋人が妹！？――　1（後書き）

いかがでしたか？　ご意見ご感想などいただけましたら幸いです。

第一章　――恋人が妹！？――　2（前書き）

第一章の2です。
それではどうぞ！

第一章　――恋人が妹！？――　2

悠斗は憂鬱だった。何故憂鬱なのかと言えば、答えは簡単。彼女として父親に紹介するはずの雛子が、戸籍上本当の『妹』になってしまったからだ。これからあんなことやこんな事を学校やゲーセンや遊園地や、その、高校生が行ってはいけないホテルとかでするはずだったのに、だ！

「俺は認めないぞ、こんな結婚！　俺たちは一昨日恋人同士になったばっかりなんだ！　それがなんで今日になっていきなり『お前たちは兄妹になるんだ』なんていわれなきゃならないんだ！！」

森林公園の一番高い場所、展望広場のテーブル席に露木家の父子と櫻井家の母子が顔を揃えている。悠大は難しい顔をして腕組みしたまま身じろぎ一つしない。だが、業を煮やしたのか、熱弁をふるう悠斗をじろりと睨み付けると視線で「黙れ」と命じた。

だが、今日の悠斗はそんなことでは止まらない。止まれない。何しろ雛子とのこれからのことが自分たちの手の届かないところで決まってしまいかねないのだから。雛子は悠斗の反対側の席で悠大と都子をちらりちらりと交互に見ながら、肩身狭そうに身を縮めている。

「雛子！　お前もいってやれ！　俺たちはずっと一緒にいるって誓ったって！　これから毎日想い出を積み重ねていくんだって！」

突然話を振られた雛子は、三人の顔を見まわすだけで何も言葉に出来ない。まるでさっきの悠大の言葉が雛子から言葉を奪う呪文だったかのように、黙り込んでいる。

「悠斗、お前、今朝父さんが再婚するっていったらどうするか聞かれて、反対しないって言ったばかりじゃないか。あの言葉は嘘だったということか？」

「うっ、そ、それとこれとは話が別だ！　よりによってなんで雛子の母さんなんだ！　なんで俺たちが本当に兄妹にならなきゃいけな

いんだ！」
「本当の……兄妹……」
それまで黙り込んでいた雛子が、悠斗のその言葉に反応した。雛子も反対するのだろうか？　悠斗は固唾を呑んで続く言葉を待った。
「おにいちゃんと、本当の兄妹になれるなんて！　わたし、夢みたい！　おにいちゃん、わたしたち、ずっと一緒にいられるよ！」
「違うだろ！　俺たちは恋人同士であって兄妹じゃない！　それともあの体育館裏での誓いは嘘だったのか？」
「体育館裏で誓ったのは、ずっと一緒にいることと、おにいちゃんって呼んでいいことだよ？」
「だあああああああああああああああああっ！　違う違う違う！！　そうじゃなくて、恋人同士らしいことをしたいとは思わないのか？　教育上不適切な、あんなことやこんなことや……」
「おにいちゃん、そんなえっちな事考えてたの……？」
雛子が自分の身体をかばうように椅子ごと後じさる。自分の煩悩が駄々漏れのなっていたことに気づいた悠斗は、両手でバシンと一発自分の頬を打って目を覚まし、話を続けた。
「とにかくだ！　兄妹ということになったら、たとえ血が繋がってなくたって世間は『恋人』とは見なしてくれなくなる！　雛子はそれでいいのか？」
「わたし……おにいちゃんと一緒にいられるならそれでもいいかも……」
「決まりだな。この再婚に反対なのは、悠斗、お前だけだ」
悠大の冷徹な声が悠斗を打ちのめす。たった二日前に味わったこの世のものとも思えない喜びが、たった二日後に絶望に取って代わるとは。しかも、味方についてくれるとばかり思っていた雛子は「おにいちゃんと一緒にいられたらそれでいい」と二人の大人の側についた。これが裏切りに思えずになんだというのだろうか。
「というわけで、私と都子さんは今日婚姻届を出してくる。当然雛子ちゃんはうちの娘だ。法律がどうだろうと、一旦家族となった子

をどうにかしようなどと考えてみろ……」
悠大は普段の良き家庭人としての顔ではなく、絶対的権力者の顔で悠斗に宣言した。
「お前の寿命が相当縮むことは覚悟しておけ。妹に手を出そうなんていう兄貴は鬼畜だ、最低だ、生きるに値しない！」
悠斗を睨み付ける悠大の瞳が、その言葉は本心だと物語っている。都子は小首をかしげて頬に手を当て「あらまあ」といった表情を浮かべている。雛子はもう悠斗と一緒に住めると言う事実にだけ頭が行っているようで、まるで相手にならない。
全てから見放された気分で、悠斗はがっくりと肩を落とした。どさりと椅子に腰をおろす。何だか視界が歪んでいる。鼻水も出てきている。ああ、自分は泣いているんだと気づくまで、悠斗にはかなりの時間が必要だった。
「もう、好きにしてくれ。俺が何を言っても、父さんが決めたことは絶対なんだろう？　だったら最初から息子の意見なんか聞くなよ」
「うむ、好きにするぞ。実は夕方には都子さんたちの荷物が家に届く。引っ越し作業を手伝うんだ。分かったな」
悠斗はふらりと席を立った。もうどうにでもなれ。それが悠斗の正直な気持ちだった。このまま家に帰ろう。財布は持ってきてる。バスにも乗れる。今はただ一人になりたい。一人になって、多分泣きたい。だが、悠大はそれを許してはくれなかった。
「なんだ、悠斗。帰るのか？　帰るなら雛子ちゃんを家まで案内してあげなさい」

＊＊＊

帰りのバスの中は、悠斗にとって地獄だった。
手の届くところに雛子がいるのに、手を伸ばせば肩を抱けるのに、もうそれは許されない。しかも、雛子はそれを受け入れている。あの体育館裏での誓いはなんだったのか。自分たちは両思いじゃなか

ったのか？　そんな想いが繰り返し悠斗の胸に押し寄せる。
雛子はバスの車窓から見える景色を眺めているだけで、なにも言ってはくれなかった。二人になればもしかしたら本心が聞けるかもしれないという悠斗の微かな希望は、ガラス製のコップのように打ち砕かれた。
やがて、バスは露木邸の最寄りの停留所に止まる。悠斗は黙って先を歩き、二人分の乗車料金を支払ってバスを降りた。
「……おにいちゃん、怒ってる……？」
何を当たり前のことを、と詰め寄りたいのをぐっとこらえて、悠斗は自宅へと足を向けた。雛子は半歩後をとことことついてくる。
「おにいちゃ……」
「俺は認めないからな」
雛子の呼びかけを、悠斗の押し殺した声が遮った。びくりと雛子の身体が震える。雛子はすがるような目で悠斗を見つめる。まるで本当の妹が兄にすがるかのように。
「俺が欲しかったのは恋人だ。彼女だ。ラヴァーだ！　妹なんて欲しくなかった！　それなのになんだ！　雛子だけは俺の側についてくれると思ってたのに……。お前は裏切り者だ！」
悠斗はそれだけ言うと、もう目の前にあった家の門扉を開いてさっさと中に入ってしまった。ドアを閉じた悠斗は背中でドアにもたれかかりながら、深いため息をついた。もしかしたら、自分は言い過ぎたのかもしれない。でも、さっき言ったことは少なくとも嘘じゃない。自分の側についてくれると信じていた、信じ切っていた雛子が、悠大と都子の側についたことに、悠斗は大きな衝撃を受けていた。
「つまりは、雛子はただ単に『おにいちゃん』が欲しかったってことか……。はははっ。笑えないギャグだよな」
悠斗はしばらく玄関で雛子が上がってくるのを待った。だが、数分待って入ってこないと、二階の自分の部屋に引き籠もった。
（神も仏もあるものか。結局俺はまたボッチの非モテの非リア充に

逆戻りだ）
　自分の部屋のベッドに倒れ込むと、悔しさで涙が滲んできた。高く持ち上げられて、全力で地面に叩きつけられたようなものだ。痛いのは身体じゃなくて心だけど。
　そうしてどのくらい時間が経っただろう。カーテン越しに差していた陽の光が陰り、ぽつり、ぽつりと天からの滴が屋根を叩く音が響きはじめた。いくらなんでも雨が降り出したら家に入ってくるに違いない。迎えに行くのは、何かに負けたような気がする悠斗だった。
　だが、数分経ってもドアが開く音は聞こえてこない。雨音はますます勢いを増していく。悠斗の脳裏に冷たい雨に打たれて震える雛子の姿が浮かんだ。
「ええい！　なんで入ってこないんだよ！」
　ベッドから跳ね起き、階段を一段飛ばしで駆け下りる。短い廊下を駆け抜け、ドアのノブを握り、捻る。
　そこには土砂降りの雨に濡れる雛子の姿があった。サンダルに乱暴に足を突っ込み、道路に飛び出す。悠斗は雛子の両肩を掴み、声の限り叫んだ。
「バカかお前は！　今日からここがお前の家なんだ！　雨が降ってるのに、こんなにずぶ濡れになるまで外にいるなんて、何考えてるんだ！」
「だって、おにいちゃん、認めてくれないから……わたしのこと」
「いいから、こっち来い！　これ以上濡れてると風邪引くぞ！」
「おにいちゃんに嫌われるくらいなら、風邪でもこじらせて死んじゃった方がいいもん」
「バカ！　俺は雛子が大好きだ！」
　伏し目がちだった雛子の表情が、ぱっと明るいものになる。
「ほんとう？」
「ああ、本当だ！　ただし、妹としてじゃないぞ？　男と女として、だ。そこをかんちがいってちょっと待て！」

ずぶ濡れの雛子が悠斗の首にぶら下がるようにして抱きついていた。近くに、あまりに近くに顔があって、目を逸らそうにもそらせない。雛子はゆっくりと目を閉じた。
「おにいちゃん……大好き」
「って、こんなに身体が冷え切って。雛子、とにかく風呂だ！　すぐ風呂沸かしてやるから入れ！　な！」
「ん……。わかった」
雨はますます強くなる。いつの間にか、悠斗の服もずぶ濡れになっていた。

＊＊＊＊

「さ、こっちだ」
「うん……」
玄関でずぶ濡れになった靴を脱がせ、廊下を水浸しにしながら、悠斗は雛子を風呂場に案内した。カランを捻ってお湯を出す。こんな時に瞬間湯沸かし器なのは有り難いと悠斗は思う。
お湯の温度が適温になったら、脱衣場に雛子を残し、悠斗はとりあえずの着替えにと自分のスウェットスーツを取りに二階の自室に上がった。クローゼットを開くと樟脳の特有の香りが鼻をつく。
「確かこの辺に……あった！
ちょっとサイズが大きいけれど、この際贅沢は言っていられない。すぐに階下に持っていく。浴室からはシャワーを浴びる音が聞こえてくる。今なら大丈夫、事故で覗いてしまうこともない。脱衣場の扉を開いて、洗面台の上に持ってきたスウェットスーツを置く。ふと脱衣かごをみると、いままさに脱いだばかりの雛子の下着が濡れた服と共に置いてあった。手に取りたいという煩悩を振り切って、悠斗は浴室内の雛子に声をかける。
「雛子……雛子。着替え、持ってきたから」
『うん……ありがとう』

「湯船にお湯はって、ちゃんと暖まれよ」
『うん……』
磨りガラスの向こうで、雛子の白い肢体が動いているのが見える。悠斗は理性をフル回転させて扉を開くのを我慢していた。心の片隅で別の悠斗が自分に囁く声が聞こえる。ドアを開けて一糸まとわぬ雛子を抱きしめてしまえと。
（そんなのはダメだ！　……でも、俺は本当はそうしたいんだよな……）
正直に言ってしまえば今この時、扉一枚を挟んで全裸の雛子がシャワーを浴びているというシチュエーションは、悠斗にとって天国以外の何ものでもない。だが、悠大の鶴の一声で、雛子は妹ということになってしまった。
このまま兄として一緒に過ごすのが正しい事なのか。きっと世間一般の常識ならばそうなのだろう。だが、自分は違う。悠斗はそう思っていた。戸籍がどうだろうと、雛子を愛する気持ちは変わりない。
「きゃっ！」
その時、雛子の短い悲鳴と何かがぶつかる音が聞こえてきた。思わず悠斗は扉を開いて中に飛び込んでいた。
「……」
「……」
「す、すべった、のか？」
「お、お、お、お……」
「せ、石けんで滑ったのか。危ないから気をつけないと」
雛子はタオルで辛うじて身体の前の方だけを隠した状態で倒れていた。ほっそりとした腰と対照的に膨らんだ胸がギリギリのところでタオルに隠れて見えない。そうこうしているうちに、みるみる雛子の顔が赤くなっていく。そして、耳まで赤くなったその時。
「お、おにいちゃんの、えっち――――――っ！！」
耳をつんざくような大音声で雛子は叫んだ。浴室の窓や扉がビリ

ビリと震える。雛子は手当たり次第にそこら辺にあるものを悠斗に向かって投げはじめた。シャンプー、リンス、入浴剤の瓶、石けん、ボディーソープ等々。
「まて、落ち着け雛子！　これは事故だ！　俺は決して下心があって覗いたわけじゃ」
「言い訳は私が聞こうか、悠斗」
氷より冷たく、鉛より重い声が背後から悠斗に投げかけられる。恐る恐る振り返ると、そこには鬼の形相の悠大が腕組みをして仁王立ちしていた。
（ああ、俺の人生もここまでかもしれない……）
「あらあら。廊下がずぶ濡れだったから、もしかしたら雨に降られたのかと思ってたんだけど、悠斗君、なかなかやるわね」
都子が微妙に話をややこしくしてくれる。今の一言で悠大の怒りゲージがワンランク上がったらしい。
「悠斗……さっさと風呂場から出て行けぇっ！！」
「ひぃっ！！」
情けない悲鳴を上げながら、悠斗は風呂場の扉を飛び出し、悠大の脇を通り抜けてドタドタと階段を上り、自室に引き籠もった。

＊＊＊

「まあ、事故だということは分かった。だがな、その原因を作ったのは、悠斗、お前だ」
雛子からの事情聴取を終えた悠大は、自室のベッドで布団にくるまっていた悠斗をたたき起こして正座させた。そしてお説教タイムである。
「着替えを用意してやったのも、まあお前なりの優しさからだろう。だが、最初から雛子ちゃんを妹と認めてうちに上げていれば問題は無かったはずだ。違うか？」
「うぅ……違いません」

「なら、雛子ちゃんを妹と認めるか？」
「それとこれとは話が……」
「同じ話だ」
「うぅっ……」
「いいか、お前たち二人は今日から兄妹だ。ただでさえ血の繋がらない年頃の男女が一つ屋根の下に暮らすんだ。世間様の目は厳しいぞ？　少しでもおかしそぶりを見せようものなら『あの二人は爛れた関係だ』と噂を立てられる。ならばそういう噂を立てられるような隙を見せないように普段から自分たちを律しろ」
「……」
「分かったのか？」
その時、悠大の胸ポケットに入っていた携帯電話が軽快な電子音を奏でた。悠大はまだ説教したりないといった様子だったが、着信名を見てから廊下に出て電話を取った。
「はい、露木です。は、はい。え？　米国赴任？　は？　再来週から？　はい、パスポートはありますので、就労ビザがあれば。はい、はい。分かりました行かせていただきます」
どうやら職場からの電話だったようだ。悠大の表情が深刻なものに変わる。
「と、父さん、どうしたの？」
「再来週から、父さんは二年間アメリカの支店に赴任することになった」
廊下で話を聞いていたのだろう、都子も姿を現す。
「せっかく籍を入れてきたのに、離ればなれなんて嫌ですわ」
「うむ。この際だ。一家全員でアメリカに……」
「ちょっと待ってくれよ！」
悠大と都子は、悠斗の言葉に振り返った。何を言うつもりだろう、という表情がありありと見える。悠斗は大きく息を吸うとはっきりと宣言した。

「俺と雛子は、日本を離れない！」

第一章　――恋人が妹！？――　2（後書き）

いかがでしたか？　よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第一章　――恋人が妹！？――　3（前書き）

第一章の3をお送りします。それではどうぞ！

第一章　――恋人が妹！？――　3

一階のリビングルーム。風呂から上がって悠斗の持ってきたスウェットスーツに着替えた雛子も交えて、四人が『家族』になってから初めての家族会議が行われていた。

「で、悠斗。お前はさっき何と言ったんだったかな？」

冷徹な悠大の声がまるで巨岩のような重さを持って悠斗にのし掛かる。だが、ここで怯んでいるわけにはいかない。悠斗はありったけの勇気を振り絞ってそのプレッシャーをはね除けた。

「俺と雛子は、日本を離れないと言ったんだ。大体、俺が仁正学園に入学するのにどれだけ勉強したと思ってるんだ？　担任教師からは『絶対無理だ、やめておけ』と言われ、友達からも『高望みはやめろ』と言い続けられ、そんな中で勝ち取った合格だぞ？　父さんはそれを紙くずのようにほいほいと捨てろっていうつもりか？　父さんだって仁正学園への合格は喜んでくれてたじゃないか」

悠大は口を一文字に結んだまま、腕組みをしてソファーに深く腰を下ろしている。悠大にとって、悠斗がこれほど反発するのは初めての経験だった。もちろん反抗期はあった。だが、「父さんの言うことは絶対だ」という教育方針の下、悠斗の反抗期はさほど長くは続かなかったのだ。

その悠斗が、恐らく初めてと言っていいほど、はっきりと自分の意志を父親に伝えようとしている。鬼のような形相の下で、悠大は正直驚かされていた。自分の息子がここまで自分の意見を主張できるほどに育っていたということに。

「だがな、悠斗。世間様はそうは見てくれないぞ？　血の繋がらない男女が一つ屋根の下に暮らすと言うことは、そこには……うぉっほん、それ、あれだ、色々と不純な事があるのじゃないかと疑われるものだ。確かに進学校の仁正学園に通い続けたいというお前の意見はもっともだ。だがな、それで家族が離ればなれになってもいい

ということはないんじゃないか？」
「俺はこのまま仁正学園に残りたい。雛子！　雛子だってそうだよな？」
突然自分に話を振られてあたふたとしていた雛子だったが、落ち着きを取り戻すと控えめながらはっきりと頷いた。
「うん……。わたし、今の学園に通い続けたい。せっかく難関を突破して入った仁正学園だもの。わたしは卒業まで通いたい」
「まあ、雛子がこんなにはっきり自分の意見を口にするなんて。もしかしたら初めてなんじゃないかしら」
都子が驚きを隠せないと行ったようすで自分の娘を見つめている。
「お母さん、わたしも日本に残りたい。アメリカにはついていかない！」
「というわけだ。これが子供たちの共通の意見ってことになる。どうだ、父さん。それとも、やっぱり『親の言うことは絶対だ』と言って受験の努力までふいにするつもりか？」
「ううむ……」
悠大の心は揺れはじめていた。確かにこの二人は恋人同士になりかけた。だが、悠斗の言動を見ていれば、雛子の嫌がることをするとは思えないし、そんな風に育てた覚えもない。雛子は悠斗になついているし、これは子供と都子を置いて自分だけでアメリカに赴任した方がいいのではないか。
「悠大さん、私はあなたについていきますからね」
「えっ？　しかし、それは……」
「あなたが何を考えていたかはお見通しです。子供たちと私を残して単身赴任しようとしていたでしょう？」
まさにその通りなので、悠大はむぅっと一言うめいたきり下を向いてしまった。
その時、玄関のチャイムが軽快な音をたて、来客を告げた。
「あ、そろそろ引っ越し屋さんが来る頃ね。家族会議は一旦中断しましょう。お夕飯の時にでも再開したらどうかしら」

「そうだな。まずは荷物を家に運び込まなきゃならん。悠斗、雛子ちゃん。手伝ってくれ」
「分かった」
「はい！」
こうして悠斗対悠大の親子対決バトルの第一回戦は、引っ越し屋の登場によって引き分けという形で終わった。引っ越し屋が荷物を手際よく運び込む間にも、悠斗は夕食のときに行われるであろう第二回戦のことを考えていた。
少なくとも、学園へ通い続けたいという意見は武器にはなった。雛子の意見もそうだ。だが、あと一つ押しが足りない。そう、それは何かが自分には分かっている。だが、それを認めてしまえば、雛子と日本に残る事はできるだろうが、恋人という関係は壊れてしまうだろう。
悠斗はその二律背反を乗り越えなければならないと心に決めるのだった。

＊＊＊

夕食は引越祝いを兼ねて出前の寿司だった。都子はせっかくだから自分が作ると言ったのだが、今日くらいはいいだろうと悠大が注文してしまったのだ。悠斗は寿司が食えるなら引っ越しも悪くないな、などと内心思いつつ、マグロばかりを狙って食べていた。
食事が終わりにさしかかった頃、悠大がわざとらしく咳払いすると、新しい三人の家族に向かって宣言した。
「それじゃあ、さっきの続きをはじめようか」
悠斗も雛子も表情が真剣なものに変わる。ここで両親を説得出来なければ、仁正学園での学園生活が終わってしまうことを意味している。それは悠斗だけでなく、雛子も望まないものだった。だから、悠斗は悠大に負けるわけにはいかないのだ。
「お前たち二人は日本に残りたい。だが、都子さんも残るのならま

だしも、都子さんは私についてくると言っている。この状況で子供たちだけを日本に残して私たち二人だけでアメリカに渡るわけにはいかない」
「なんでさ！　俺は家事全般何でも出来るし、生活に不自由はないはずだ！　それに、仁正学園に匹敵するレベルの授業をやってくれる高校なんて、そうそう見つかりはしないぞ？」
「だがな、世間体というものがあってだな……。父さんや都子さんが子供を放り出して二人だけでアメリカに行ったという評判が立てば、それには尾ひれがついて世間様に知れわたる事になる」
「つまりは、俺と雛子の血が繋がっていない事が問題なんだろう？」
悠大は鷹揚に頷いた。
「ならば、その件はもう解決済みだ」
「どういうことだ」
悠斗はぐっと奥歯を噛みしめ、拳を白くなるほどに握りしめ、ソファーから立ち上がった。
「俺は、雛子を妹として認める！　だから、俺は兄として雛子をどんなことがあっても、何からも護ってみせる！　たとえ父さんや都子さんがいなくたって、俺は雛子を護ってやる！　どうだ、これで問題はないだろう！？」
言い終えた悠斗は、大きく肩で息をしていた。これで全ては変わってしまう。雛子との関係も、これまでの『彼氏と彼女』から『義兄と義妹』に変わってしまう。だが、それでも一緒にいられないよりはいい。仁正学園に、一緒に通えなくなるよりはずっといい。全ては自分が耐えれば済むことなのだと、悠斗はそう思っていた。
「その言葉に、嘘はないか、悠斗」
「ああ、一切ない！」
本当は未練たらたらなのだが、悠斗はぐっとそれを飲み込んで、父に返答していた。悠大は腕組みして黙考する。リビングの壁に掛けられたアナログ時計の秒針が時を刻む音がかち、かち、かちと静かな室内に響く。まるで永遠の長さのように感じられる数秒間が過

ぎ、悠大がふぅっと息をつき顔をあげた。
「分かった。悠斗を信じよう。悠斗は私の息子だ。その息子が全てをかけて雛子ちゃんを妹として護るというのだから、これを信じなくて何が父親だ」
「悠大さん……」
「都子さん。私たちの子供たちは、思っていた以上に大人になっていたということです。あなたは、私についてきてくれますね？」
都子は花がほころぶような笑顔を浮かべると、静かに、しかし確かに頷いた。
「もちろんですわ。悠大さんが行くところなら、私はどこにでも黙ってついていきます」
「ありがとう。悠斗、飯を食い終わったらちょっと話がある。部屋に居ろ」
「う、うん。分かった」

＊＊＊

夕食の後、悠斗が父に言われたとおり自室で待っていると、ドアをノックする音が聞こえた。
「悠斗、いるか？」
「いるよ。どうぞ」
扉を開く音と共に、悠大が姿を現す。いつもはとても大きく見える悠大の身体が、不思議なことに何故かその時の悠斗にはとても小さく見えた。
「父さんな、正直お前があそこまで強硬に反発するとは思っていなかったんだ。いつも父さんの言うことにはちゃんと従ってきたお前だからな。今回の再婚の件も、雛子ちゃんの件も、アメリカ赴任の件も……。全部まとめて驚かされた」
「正直、俺だって怖かったさ。ぶん殴られるんじゃないかって思ってた。でも、学校のことは本当に譲れなかったんだ。俺は頭が良く

ないから、仁正学園の授業についていくのもやっとだけど、このままならそこそこいい大学だって狙えるかもしれない。でも、今アメリカにいったら、それもふいになっちまう。雛子もそうだよ。やっとの思いで入学した途端に転校なんて、そんなのあんまりだ」
悠大はベッドの端に腰掛け、悠斗はその対面にある机の椅子に腰を下ろす。
「雛子ちゃんのことは、本当に妹として認めるんだな？」
「さっきも言ったとおりだよ。雛子は俺の妹だ」
「そうか。ならばいいんだ。邪魔をしたな。明日からまた学校だ。寝坊しないように、早めに寝ろ」
それだけ言うと、悠大は静かに部屋を出て行った。トントントンと階段を下りる足音が聞こえる。きっといつものように一杯やってから寝るのだろうと悠斗は思った。
悠斗は、閉じられた扉をじっと見ながら自問していた。俺は本当に雛子を諦められるのか？　あの初めて雛子を新入生の中から見つけ出した時の衝撃。一ヶ月半に渡ってうじうじと悩み続けたこと。そして、二日前の体育館裏での告白と誓い……。
「ダメだよな。俺にはやっぱり諦められない。でも、雛子と日本に残るにはこうするしかないんだ」
ベッドにどさりとうつぶせになる。自然に涙が滲んでくる。泣きわめいたら、少しは気分が晴れるかもしれない。だが、悠斗は布団で涙を拭くと奥歯を噛みしめてそれ以上涙が溢れてくるのを必死で耐えた。
（こんなことで泣いていたら、雛子を護るなんて出来やしない！）
その時、悠斗の部屋の扉を控えめにノックする音が悠斗の鼓膜をふるわせた。こんな時間にだれだ？　悠大ならもっと大きな音でノックするだろうし、都子は多分悠大に付き合って下で酒を飲んでいるだろう。
「おにいちゃん、雛子だよ。入ってもいい？」
雛子の小さな声が扉の向こうから聞こえてきた。一瞬悠斗の心臓

が跳ね上がる。こんな時間に、男の部屋にくるなんて。いやいや、妹なんだから不思議じゃないだろう。でも血は繋がっていないわけで……。一瞬のうちに悠斗の頭の中で様々な思いが交錯する。

「入っちゃ、ダメかな」

雛子の声には、僅かな陰りがあった。悠斗は胸を締め付けられる思いで扉の前の立つと、静かにそれを開いた。そこには、自分の荷物の中から出したのだろう、ピンクのパジャマを着た雛子の姿があった。

「入っていいよ」

「よかったぁ。ダメって言われたらどうしようって思っちゃった。ふぅん、これがおにいちゃんの部屋かぁ」

物珍しそうにキョロキョロと周りを見まわす雛子。悠斗はまだ風呂場でのことを謝罪していないことに気づいた。だが、あれは言わない方がいいのだろうか？　悠斗は迷っていた。謝るべきか、無かったこととして封印してしまうか。そして、彼は決断を下した。

「ひ、雛子。その……風呂場でのことだけど……。ごめん！　本当に覗いたりするつもりじゃなかったんだ！　倒れる音が聞こえて、慌てて飛び込んでみたら、その……」

雛子は悠斗の言葉が進むごとにじわりじわりと顔を赤くしていた。頭から湯気が出そうなほどに真っ赤になった雛子は、それこそ聞こえるか聞こえないかといった感じの声でぽそぽそと呟いた。

「わ、わたしこそ、ごめんなさい。手当たり次第そこらにあるもの投げてぶつけて……。痛かったでしょ？」

「いや、そんなに大したことはないから！　それより、雛子に恥ずかしい思いさせて……ほんとうにごめん」

雛子はますます赤くなりながら消え入りそうな声で言った。

「いいよ……」

「えっ？」

「おにいちゃんになら、見られてもいいもん。大丈夫だもん。だって家族だもん」

それだけ言うと、雛子は桜の花びらのような脣をきゅっと結ぶと、下を向いて黙り込んでしまった。悠斗は今雛子が言った言葉を反芻していた。『おにいちゃんになら、見られてもいいもん』『見られてもいいもん』『見られても』……。その途端、悠斗の脳裏に風呂場で見た雛子の肢体が蘇ってきた。ほっそりとした手脚。きゅっと締まった腰、ふっくらとした胸元……。

想い出すにつれ、悠斗の鼻の穴から、真っ赤な液体がつうっと垂れてくる。

「あうっ！　鼻血が！　ティッシュ……」

雛子がベッドの宮に置いてあった箱入りティッシュを悠斗に手渡す。手で鼻の穴を押さえていた悠斗の右手は鼻血で真っ赤に染まっている。ティッシュを丸めて鼻の穴に突っ込むと、悠斗は机の上にあったウェットティッシュで手を拭いた。

「ごめんな。あんな風に啖呵切ったけど、俺、やっぱり雛子のこと大好きだし、女の子だと思って見ちゃってるんだ。でも、おれは『おにいちゃん』だからな！　これからは雛子をどんなことからも護ってやる！　任せておけ！」

鼻血を噴いてティッシュを鼻の穴に詰めて言っても説得力に欠けるというものだが、それでも雛子には悠斗の言葉が頼もしく響いていた。

「うん。おにいちゃん。わたしもおにいちゃんが大好き。誰よりも大好きだよ」

「雛子……」

「それに、血の繋がらない兄妹での禁断の愛って、実はちょっとあこがれてたの。これってまさにそのシチュエーションよね」

悠斗はがくっとその場にくずおれた。禁断の愛。まあ、世間様から見ればそうも見えなくも無いのかもしれないけど、それにあこがれる雛子って、もしかして相当の変わり者なのだろうか？　悠斗がそんな疑問を抱いていると、耳元で雛子の囁き声がした。

「ね、おにいちゃん。ちょっとだけ目をつぶっててくれないかな」

悠斗は何故だろうと思いながらも雛子の言うとおりに目を閉じた。次の瞬間、悠斗の唇がなにか柔らかく、暖かなものに触れていた。

「……！！」

それは雛子の唇だった。二日前の体育館裏でのキスより、ほんの少し深く、情熱的なキスだった。ほんの僅かではあったが。ゆっくりと唇を離すと、雛子は照れ笑いを浮かべて言った。

「えへへっ。おやすみのキスだよ、おにいちゃん！」

それだけ言うと、雛子は扉を開けて廊下へと出て行き、最後にちらりと部屋の中の悠斗を見やると、軽く手を振って扉を閉じた。悠斗はというと、突然唇を奪われたことに呆然として、しばらく放心状態だった。だが、だんだんと両の拳に力を込めるとそれを天に突き上げてガッツポーズの形にしていた。叫びたい気分だったが、悠斗は理性をフル動員して、どうにかそれだけは免れた。

第一章　――恋人が妹！？――　3（後書き）

いかがでしたか？よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第一章　――恋人が妹！？――　４（前書き）

第一章の４をお送りします。
それではどうぞ！

第一章　――恋人が妹！？――　4

一階のリビングルーム。風呂から上がって悠斗の持ってきたスウェットスーツに着替えた雛子も交えて、四人が『家族』になってから初めての家族会議が行われていた。

「で、悠斗。お前はさっき何と言ったんだったかな？」

冷徹な悠大の声がまるで巨岩のような重さを持って悠斗にのし掛かる。だが、ここで怯んでいるわけにはいかない。悠斗はありったけの勇気を振り絞ってそのプレッシャーをはね除けた。

「俺と雛子は、日本を離れないと言ったんだ。大体、俺が仁正学園に入学するのにどれだけ勉強したと思ってるんだ？　担任教師からは『絶対無理だ、やめておけ』と言われ、友達からも『高望みはやめろ』と言い続けられ、そんな中で勝ち取った合格だぞ？　父さんはそれを紙くずのようにほいほいと捨てろっていうつもりか？　父さんだって仁正学園への合格は喜んでくれてたじゃないか」

悠大は口を一文字に結んだまま、腕組みをしてソファーに深く腰を下ろしている。悠大にとって、悠斗がこれほど反発するのは初めての経験だった。もちろん反抗期はあった。だが、「父さんの言うことは絶対だ」という教育方針の下、悠斗の反抗期はさほど長くは続かなかったのだ。

その悠斗が、恐らく初めてと言っていいほど、はっきりと自分の意志を父親に伝えようとしている。鬼のような形相の下で、悠大は正直驚かされていた。自分の息子がここまで自分の意見を主張できるほどに育っていたということに。

「だがな、悠斗。世間様はそうは見てくれないぞ？　血の繋がらない男女が一つ屋根の下に暮らすと言うことは、そこには……うぉっほん、それ、あれだ、色々と不純な事があるのじゃないかと疑われるものだ。確かに進学校の仁正学園に通い続けたいというお前の意見はもっともだ。だがな、それで家族が離ればなれになってもいい

ということはないんじゃないか？」
「俺はこのまま仁正学園に残りたい。雛子！　雛子だってそうだよな？」
突然自分に話を振られてあたふたとしていた雛子だったが、落ち着きを取り戻すと控えめながらはっきりと頷いた。
「うん……。わたし、今の学園に通い続けたい。せっかく難関を突破して入った仁正学園だもの。わたしは卒業まで通いたい」
「まあ、雛子がこんなにはっきり自分の意見を口にするなんて。もしかしたら初めてなんじゃないかしら」
都子が驚きを隠せないと行ったようすで自分の娘を見つめている。
「お母さん、わたしも日本に残りたい。アメリカにはついていかない！」
「というわけだ。これが子供たちの共通の意見ってことになる。どうだ、父さん。それとも、やっぱり『親の言うことは絶対だ』と言って受験の努力までふいにするつもりか？」
「ううむ……」
悠大の心は揺れはじめていた。確かにこの二人は恋人同士になりかけた。だが、悠斗の言動を見ていれば、雛子の嫌がることをするとは思えないし、そんな風に育てた覚えもない。雛子は悠斗になついているし、これは子供と都子を置いて自分だけでアメリカに赴任した方がいいのではないか。
「悠大さん、私はあなたについていきますからね」
「えっ？　しかし、それは……」
「あなたが何を考えていたかはお見通しです。子供たちと私を残して単身赴任しようとしていたでしょう？」
まさにその通りなので、悠大はむぅっと一言うめいたきり下を向いてしまった。
その時、玄関のチャイムが軽快な音をたて、来客を告げた。
「あ、そろそろ引っ越し屋さんが来る頃ね。家族会議は一旦中断しましょう。お夕飯の時にでも再開したらどうかしら」

「そうだな。まずは荷物を家に運び込まなきゃならん。悠斗、雛子ちゃん。手伝ってくれ」
「分かった」
「はい！」
こうして悠斗対悠大の親子対決バトルの第一回戦は、引っ越し屋の登場によって引き分けという形で終わった。引っ越し屋が荷物を手際よく運び込む間にも、悠斗は夕食のときに行われるであろう第二回戦のことを考えていた。
少なくとも、学園へ通い続けたいという意見は武器にはなった。雛子の意見もそうだ。だが、あと一つ押しが足りない。そう、それは何かが自分には分かっている。だが、それを認めてしまえば、雛子と日本に残る事はできるだろうが、恋人という関係は壊れてしまうだろう。
悠斗はその二律背反を乗り越えなければならないと心に決めるのだった。

＊＊＊

夕食は引越祝いを兼ねて出前の寿司だった。都子はせっかくだから自分が作ると言ったのだが、今日くらいはいいだろうと悠大が注文してしまったのだ。悠斗は寿司が食えるなら引っ越しも悪くないな、などと内心思いつつ、マグロばかりを狙って食べていた。
食事が終わりにさしかかった頃、悠大がわざとらしく咳払いすると、新しい三人の家族に向かって宣言した。
「それじゃあ、さっきの続きをはじめようか」
悠斗も雛子も表情が真剣なものに変わる。ここで両親を説得出来なければ、仁正学園での学園生活が終わってしまうことを意味している。それは悠斗だけでなく、雛子も望まないものだった。だから、悠斗は悠大に負けるわけにはいかないのだ。
「お前たち二人は日本に残りたい。だが、都子さんも残るのならま

だしも、都子さんは私についてくると言っている。この状況で子供たちだけを日本に残して私たち二人だけでアメリカに渡るわけにはいかない」
「なんでさ！　俺は家事全般何でも出来るし、生活に不自由はないはずだ！　それに、仁正学園に匹敵するレベルの授業をやってくれる高校なんて、そうそう見つかりはしないぞ？」
「だがな、世間体というものがあってだな……。父さんや都子さんが子供を放り出して二人だけでアメリカに行ったという評判が立てば、それには尾ひれがついて世間様に知れわたる事になる」
「つまりは、俺と雛子の血が繋がっていない事が問題なんだろう？」
悠大は鷹揚に頷いた。
「ならば、その件はもう解決済みだ」
「どういうことだ」
悠斗はぐっと奥歯を噛みしめ、拳を白くなるほどに握りしめ、ソファーから立ち上がった。
「俺は、雛子を妹として認める！　だから、俺は兄として雛子をどんなことがあっても、何からも護ってみせる！　たとえ父さんや都子さんがいなくたって、俺は雛子を護ってやる！　どうだ、これで問題はないだろう！？」
言い終えた悠斗は、大きく肩で息をしていた。これで全ては変わってしまう。雛子との関係も、これまでの『彼氏と彼女』から『義兄と義妹』に変わってしまう。だが、それでも一緒にいられないよりはいい。仁正学園に、一緒に通えなくなるよりはずっといい。全ては自分が耐えれば済むことなのだと、悠斗はそう思っていた。
「その言葉に、嘘はないか、悠斗」
「ああ、一切ない！」
本当は未練たらたらなのだが、悠斗はぐっとそれを飲み込んで、父に返答していた。悠大は腕組みして黙考する。リビングの壁に掛けられたアナログ時計の秒針が時を刻む音がかち、かち、かちと静かな室内に響く。まるで永遠の長さのように感じられる数秒間が過

ぎ、悠大がふぅっと息をつき顔をあげた。
「分かった。悠斗を信じよう。悠斗は私の息子だ。その息子が全てをかけて雛子ちゃんを妹として護るというのだから、これを信じなくて何が父親だ」
「悠大さん……」
「都子さん。私たちの子供たちは、思っていた以上に大人になっていたということです。あなたは、私についてきてくれますね？」
都子は花がほころぶような笑顔を浮かべると、静かに、しかし確かに頷いた。
「もちろんですわ。悠大さんが行くところなら、私はどこにでも黙ってついていきます」
「ありがとう。悠斗、飯を食い終わったらちょっと話がある。部屋に居ろ」
「う、うん。分かった」

＊＊＊

夕食の後、悠斗が父に言われたとおり自室で待っていると、ドアをノックする音が聞こえた。
「悠斗、いるか？」
「いるよ。どうぞ」
扉を開く音と共に、悠大が姿を現す。いつもはとても大きく見える悠大の身体が、不思議なことに何故かその時の悠斗にはとても小さく見えた。
「父さんな、正直お前があそこまで強硬に反発するとは思っていなかったんだ。いつも父さんの言うことにはちゃんと従ってきたお前だからな。今回の再婚の件も、雛子ちゃんの件も、アメリカ赴任の件も……。全部まとめて驚かされた」
「正直、俺だって怖かったさ。ぶん殴られるんじゃないかって思ってた。でも、学校のことは本当に譲れなかったんだ。俺は頭が良く

ないから、仁正学園の授業についていくのもやっとだけど、このままならそこそこいい大学だって狙えるかもしれない。でも、今アメリカにいったら、それもふいになっちまう。雛子もそうだよ。やっとの思いで入学した途端に転校なんて、そんなのあんまりだ」
悠大はベッドの端に腰掛け、悠斗はその対面にある机の椅子に腰を下ろす。
「雛子ちゃんのことは、本当に妹として認めるんだな？」
「さっきも言ったとおりだよ。雛子は俺の妹だ」
「そうか。ならばいいんだ。邪魔をしたな。明日からまた学校だ。寝坊しないように、早めに寝ろ」
それだけ言うと、悠大は静かに部屋を出て行った。トントントンと階段を下りる足音が聞こえる。きっといつものように一杯やってから寝るのだろうと悠斗は思った。
悠斗は、閉じられた扉をじっと見ながら自問していた。俺は本当に雛子を諦められるのか？　あの初めて雛子を新入生の中から見つけ出した時の衝撃。一ヶ月半に渡ってうじうじと悩み続けたこと。そして、二日前の体育館裏での告白と誓い……。
「ダメだよな。俺にはやっぱり諦められない。でも、雛子と日本に残るにはこうするしかないんだ」
ベッドにどさりとうつぶせになる。自然に涙が滲んでくる。泣きわめいたら、少しは気分が晴れるかもしれない。だが、悠斗は布団で涙を拭くと奥歯を噛みしめてそれ以上涙が溢れてくるのを必死で耐えた。
（こんなことで泣いていたら、雛子を護るなんて出来やしない！）
その時、悠斗の部屋の扉を控えめにノックする音が悠斗の鼓膜をふるわせた。こんな時間にだれだ？　悠大ならもっと大きな音でノックするだろうし、都子は多分悠大に付き合って下で酒を飲んでいるだろう。
「おにいちゃん、雛子だよ。入ってもいい？」
雛子の小さな声が扉の向こうから聞こえてきた。一瞬悠斗の心臓

が跳ね上がる。こんな時間に、男の部屋にくるなんて。いやいや、妹なんだから不思議じゃないだろう。でも血は繋がっていないわけで……。一瞬のうちに悠斗の頭の中で様々な思いが交錯する。

「入っちゃ、ダメかな」

雛子の声には、僅かな陰りがあった。悠斗は胸を締め付けられる思いで扉の前の立つと、静かにそれを開いた。そこには、自分の荷物の中から出したのだろう、ピンクのパジャマを着た雛子の姿があった。

「入っていいよ」

「よかったぁ。ダメって言われたらどうしようって思っちゃった。ふぅん、これがおにいちゃんの部屋かぁ」

物珍しそうにキョロキョロと周りを見まわす雛子。悠斗はまだ風呂場でのことを謝罪していないことに気づいた。だが、あれは言わない方がいいのだろうか？　悠斗は迷っていた。謝るべきか、無かったこととして封印してしまうか。そして、彼は決断を下した。

「ひ、雛子。その……風呂場でのことだけど……。ごめん！　本当に覗いたりするつもりじゃなかったんだ！　倒れる音が聞こえて、慌てて飛び込んでみたら、その……」

雛子は悠斗の言葉が進むごとにじわりじわりと顔を赤くしていた。頭から湯気が出そうなほどに真っ赤になった雛子は、それこそ聞こえるか聞こえないかといった感じの声でぽそぽそと呟いた。

「わ、わたしこそ、ごめんなさい。手当たり次第そこらにあるもの投げてぶつけて……。痛かったでしょ？」

「いや、そんなに大したことはないから！　それより、雛子に恥ずかしい思いさせて……ほんとうにごめん」

雛子はますます赤くなりながら消え入りそうな声で言った。

「いいよ……」

「えっ？」

「おにいちゃんになら、見られてもいいもん。大丈夫だもん。だって家族だもん」

それだけ言うと、雛子は桜の花びらのような脣をきゅっと結ぶと、下を向いて黙り込んでしまった。悠斗は今雛子が言った言葉を反芻していた。『おにいちゃんになら、見られてもいいもん』『見られてもいいもん』『見られても』……。その途端、悠斗の脳裏に風呂場で見た雛子の肢体が蘇ってきた。ほっそりとした手脚。きゅっと締まった腰、ふっくらとした胸元……。

想い出すにつれ、悠斗の鼻の穴から、真っ赤な液体がつうっと垂れてくる。

「あうっ！　鼻血が！　ティッシュ……」

雛子がベッドの宮に置いてあった箱入りティッシュを悠斗に手渡す。手で鼻の穴を押さえていた悠斗の右手は鼻血で真っ赤に染まっている。ティッシュを丸めて鼻の穴に突っ込むと、悠斗は机の上にあったウェットティッシュで手を拭いた。

「ごめんな。あんな風に啖呵切ったけど、俺、やっぱり雛子のこと大好きだし、女の子だと思って見ちゃってるんだ。でも、おれは『おにいちゃん』だからな！　これからは雛子をどんなことからも護ってやる！　任せておけ！」

鼻血を噴いてティッシュを鼻の穴に詰めて言っても説得力に欠けるというものだが、それでも雛子には悠斗の言葉が頼もしく響いていた。

「うん。おにいちゃん。わたしもおにいちゃんが大好き。誰よりも大好きだよ」

「雛子……」

「それに、血の繋がらない兄妹での禁断の愛って、実はちょっとあこがれてたの。これってまさにそのシチュエーションよね」

悠斗はがくっとその場にくずおれた。禁断の愛。まあ、世間様から見ればそうも見えなくも無いのかもしれないけど、それにあこがれる雛子って、もしかして相当の変わり者なのだろうか？　悠斗がそんな疑問を抱いていると、耳元で雛子の囁き声がした。

「ね、おにいちゃん。ちょっとだけ目をつぶっててくれないかな」

悠斗は何故だろうと思いながらも雛子の言うとおりに目を閉じた。次の瞬間、悠斗の唇がなにか柔らかく、暖かなものに触れていた。
「……！！」
それは雛子の唇だった。二日前の体育館裏でのキスより、ほんの少し深く、情熱的なキスだった。ほんの僅かではあったが。ゆっくりと唇を離すと、雛子は照れ笑いを浮かべて言った。
「えへへっ。おやすみのキスだよ、おにいちゃん！」
それだけ言うと、雛子は扉を開けて廊下へと出て行き、最後にちらりと部屋の中の悠斗を見やると、軽く手を振って扉を閉じた。悠斗はというと、突然唇を奪われたことに呆然として、しばらく放心状態だった。だが、だんだんと両の拳に力を込めるとそれを天に突き上げてガッツポーズの形にしていた。叫びたい気分だったが、悠斗は理性をフル動員して、どうにかそれだけは免れた。

4

雛子の『おやすみのキス』の衝撃で、悠斗の中の煩悩パワーはフル回転をはじめていた。だが、悠斗は悠大たちの前で雛子を兄として護ると宣言している。この約束を違えることは出来ない。
「俺は一体どうしたらいいんだ……」
布団の中で悶々と眠れない夜を過ごし、時間はもうすぐ午前四時。目を閉じると風呂場で見た雛子のあられもない姿が目に浮かんできて、男としての生理機能が目を覚ます。だが、義妹をオカズにするというラインだけはギリギリの理性で回避し続ける悠斗だった。
「おはよう……」
結局悠斗はその晩一睡も出来なかった。たかだかキスくらいと笑うなかれ。彼女いない歴＝年齢だった悠斗にとって、キスとはあいさつ程度のものではないのだ。それは野生の本能を呼び覚まし、男としての機能をも呼び起こす。
「あら、悠斗君、おはよう。朝食できてるわよ？」

いつもより早く起き出して来たのにもかかわらず、都子はすでに朝食の支度を調えていた。誰かに朝食を用意してもらうなんて、何年ぶりだろうかと感慨にふけっていると、まだ眠そうな雛子が階下に降りてきた。

「んー、おはよう……えっ？　おにいちゃん！？　なんでうちに！？」

「昨日から家族になっただろ、って寝ぼけてるな、これは。ほら、洗面所はこっちだ。顔洗っておいで」

「んー……」

キッチンからは味噌汁の香りが漂ってくる。寝不足の脳にもそれは嗅覚神経を通じて送られていて、悠斗は無性に食欲をかき立てられた。

「悠斗君、先にご飯食べちゃう？」

都子が実に魅力的な提案をしてくる。だが、朝も露木家では親子揃っての食事が基本だった。

「いえ、父さんが降りてくるまで待ちます」

「そう。そういえば、露木家は家族揃っての食事が基本だったわよね」

「櫻井家ではそうじゃなかったんですか？」

「私が仕事で遅くなることが多かったから、ね。雛子だけで先に済ませてもらうことが多かったわ」

悠斗は一人で食事をとる雛子の姿を思い浮かべていた。それはあまりに寂しい光景で、これからはそんな寂しい思いはさせまいと、悠斗は強く決意するのだった。

しばらくすると、悠大が寝室から降りてきた。すでにスラックスにカッターシャツ。首にはネクタイという姿である。あとは上着を着て鞄を持てば通勤出来る格好だ。洗面は二階にもある洗面台で済ませたのだろう。

悠大はいつもそうである。常に隙を見せないのだ。格好だけではなく、悠大は仕事の上でも常に隙を見せない。それ故に会社では部

下を何人も率いる立場にいるのだ。
「おはよう、都子さん、悠斗。雛子ちゃんは洗面所かな？　二階のは私が使っていたのでね」
「さっき寝ぼけながら降りてきたよ。今顔を洗ってるはずだ。はい、新聞」
悠斗は全国紙と経済紙の二部の新聞を悠大に手渡す。いつものように、悠大は経済紙から目を通しはじめた。
「悠大さん、新聞は後にしてご飯にしましょう。雛子も来ましたし」
「あ……おはよう……ございます」
「ん、おはよう、雛子ちゃん。目は覚めたかい？」
「は、はい！　それはもうバッチリ」
「そうか。じゃあ、露木家の恒例行事。家族揃っての食事といこう」
ダイニングテーブルの悠斗の席の隣が雛子の席になった。悠大の隣が都子だ。これまで、たった二人で、それでも家族がそろって食事をしてきたダイニングテーブルが、急に賑やかになったように悠斗は感じていた。
「では、いただきます」
『いただきます』
賑やかになった食卓を楽しんでいたのは悠斗だけではなく、雛子も、都子も、そして悠大もまた大いに楽しんでいた。

＊＊＊

二週間なんていうものは、普通に生活していればあっという間にすぎていくもので、明日はいよいよ悠大と都子がアメリカに旅立つ日である。ちなみに赴任先はアメリカ西海岸の大都市、シアトル。当分はホテル暮らしをしながら、アパートメントを探すという。
二週間の間に、悠斗の心の中にもある種の余裕のようなものが出来つつあった。煩悩はしっかり保ったままだったが、それを人様にさらけ出さない程度には理性で行動できるようになった、というべ

きだろうか。だが、そんな彼でもたとえば雛子の部屋の中から衣擦れの音が聞こえてきたりした日には、理性をぶっちぎって煩悩が大爆発しそうにもなるのだった。
『ん……、ちょっとブラがきつくなったかも……また大きくなっちゃったのかなぁ……。いやだなぁ』
扉から漏れ聞こえる雛子のつぶやきに、鼻血を垂らしながら聞き入る義兄の姿。最近ご近所では「露木さんのところの新しい妹さん、お兄さんにもなついてほほえましいわね」などと噂されているにもかかわらず、いざ煩悩のスイッチが入るとこれである。やはり悠斗は悠斗ということだろうか。
「はぁ、はぁ……、ひ、雛子、俺が護ってやるからな」
悠斗は煩悩を何とかして払いのけながら、常備し始めたポケットティッシュを鼻に詰め込む。実に情けない姿ではある。
その時突然扉が開かれ、学園の制服姿の雛子が姿を現した。
「ん？　おにいちゃん、どうしたの？」
「ななな、なんでもない！　ちょっと最近鼻の粘膜が弱くなったみたいでな。鼻をかむと鼻血が出たりするんだよ」
「それより、そろそろ時間じゃない？」
「ああっ、もうそんな時間か！？」
悠大と都子は、アメリカに旅立つ前日に、簡単ながら結婚式を挙げることにしていたのだ。
二週間での準備だから、本当に簡単な式しか挙げられないが、これは都子のたっての希望だった。
悠斗も土曜日だというのに学園の詰め襟制服に身を包んでいて、いつでも出発する準備は出来てはいたのだが、雛子の着替えの脳内妄想で時間のことをすっかり忘れ去っていたのだ。
「さ、おにいちゃん。お父さんたちが待ってるよ！」
この二週間で、雛子は悠大を『お父さん』と抵抗なく呼ぶようになっていた。最初は遠慮がちに、でもだんだんと自然に。悠斗も都子のことを『母さん』と呼ぶようになってしばらく経つ。ただ、こ

ちらはまだ照れが混じっているのだが。
一階に降りると、すでに玄関前にタクシーが待っており、両親もいつでも出発が出来る姿だった。
「よし、みんな揃ったな。じゃあ、式場にいこうか」
悠大の一言で全員が動き出す。大きな荷物がいくつかあるのは、式の後はそのまま式場のあるホテルに宿泊するからだ。明日はそこから最寄りの国際空港へと向かい、そこから空路シアトルへと旅立つ。子供たちは空港まで見送ったあとは、そのまま家に帰ることになっていた。
悠大がタクシーの前席に乗り込むと、運転手は静かに車を発進させた。ホテルまでは高速を使えばタクシーで二〇分ほどだ。悠斗は手持ちぶさたにシートベルトを指先で弄りながら、今後の事を考えていた。
明日からは、悠大と都子の二人はいない。考えようによってはこれは大チャンスだ。既成事実を作ってしまえという悪魔の囁きが聞こえるような気が、悠斗にはしていた。だが、あくまでも悠斗は兄として雛子を護ると誓ったのだ。だから、雛子が嫌がるようなことは出来はしない。それに何より、いざとなったら多分雛子が許したとしても、度胸がなくてなにも出来ないだろう。そんな悠斗だった。
高速を降りしばらく走ると、空港に隣接した大きなホテルが見えてくる。二週間前という非常識なスケジュールを実現出来たのは、悠大の会社がこのホテルの大得意であり、悠大自身もよく利用するからだった。やがて車はホテルの車寄せに滑り込むようにして停車する。
ホテルのフロントで結婚式の予約をしている旨を告げると、受付をしてくれたホテルマンはてきぱきと必要な部署に連絡をした。
「六階がお召し替えのお部屋になります。まずはそちらへどうぞ」
ホテルマンの先導でエレベーターに乗る。するするとエレベーターが上昇する感覚を感じながら、悠斗たちは六階へと上った。六階には小さな受付があり、そこで新郎新婦と家族の名前を記名する。

悠斗たちにとっては初めての経験で、記名するときの手が少しだけ震えていた。
　そして、新郎である悠大と、新婦である都子はそれぞれ別室に案内された。悠斗と雛子は廊下に並べてある椅子で待ちぼうけである。
「結構着替えにも時間かかるんだろうなぁ」
「ん……、そうだろうね。でもどんなドレスなんだろう。早くみたいなぁ」
「雛子はやっぱりドレス派か。神前式の結婚式もいいもんだと思うけどな、俺は」
「そうなんだけどね。やっぱりドレスは着てみたいなぁ」
　悠斗はウエディングドレス姿の雛子を想像してみた。それは想像するだけで抱き上げてお持ち帰りしたくなるほどに愛らしく、美しい姿だった。妄想だけでこれだけ綺麗なのだから、本人に着せたらどれだけ綺麗か想像もつかない。悠斗は密かにポケットティッシュに手を伸ばし、鼻血の来襲に備えた。
「お待たせしました。ご家族の方はこちらへどうぞ」
　ホテルのブライダルスタッフが悠斗たちを呼びに来る。そこには純白のタキシードを着た悠大と、真っ白なウエディングドレス姿の都子が並んで立っていた。思わず二人の口から感嘆の溜息が漏れる。
「お父さん、ダンディ……」
「母さん、すげー綺麗……」
「褒めても何も出ないぞ？　さあ、招待客も揃ったようだし、そろそろ式本番だな」
「はい、悠大さん」
　六階の廊下をしばらく歩くと、何やらアンティークなデザインの木の扉がある。そこをブライダルスタッフが開くと、ホテルの六階には小さな中庭のような空間が広がり、その中央に小さなチャペルがあった。
　参列者はすでに揃っている。元々急な結婚式だ。極々近しい者しか呼んでいない。それでも、参列者たちは盛大な拍手でもって新郎

新婦を迎えた。都子の瞳に光るものが見える。
「こら、都子さん。泣くのはまだ早いよ」
「ええ、悠大さん。分かってます」
悠斗と雛子は二人の後に続いてチャペルへと入っていった。
荘厳なパイプオルガンの演奏、聖歌隊による合唱。神父による誓いの儀式と指輪の交換。そして、誓いの口づけ。どれもが悠斗にとって眩しいものであって、同時にもし雛子とこういう関係になれたらと思うものでもあった。雛子は悠斗の隣で黙って静かに涙を流していた。
「雛子？」
「ん……、お母さん、よかったなって」
「そうだな。すっげー幸せそうだ」
「お父さん……前のお父さんね、交通事故でわたしが小学校に上がる前に死んじゃったの。それからずっと、わたしを育てるために一人で頑張ってきて、やっと新しい幸せを掴んだんだね」
「父さんもそうさ。二人が結婚するって聞いて最初は反対だったけど、こんな幸せそうな顔されちゃ、反対なんて言ってられないよな」
「おにいちゃんは、今でもわたしが……好き……なんだよね？」
「ああ、でも俺は雛子のおにいちゃんだからな！」
無理に笑顔を作って見せる悠斗。傍目には仲むつまじい兄妹にしか見えないこの二人だが、やはりどうにも複雑な感情が入り乱れているようである。

＊＊＊

明くる日、国際空港の出発ロビーに露木家の四人が揃っていた。当分の間、家族四人が揃うことはない。そう思うと、何とも言えない寂しさを感じる悠斗だった。それは雛子も同じだったようで「最後の夜だから」といって都子と一緒に寝たのだった。
「父さん、初夜だったのに残念だったね」

「ぶっ、ばかもん！　あれは最初からそうするつもりで部屋を取ってあったんだ。だから両方ともツインルームだっただろう？」
なるほど、と悠斗は納得した。そう言えば昨夜の悠大は妙に饒舌だったと悠斗は気づく。当分の間会えない息子との時間を大切にしたかったのかもしれない。そう考えると、自分ももっとたくさん話をしておくべきだったかもしれないと思う悠斗だった。
搭乗手続きが済み、悠大と都子は搭乗者待合室へと入っていった。もうあそこはある意味日本ではない。ほんの十数メートルしかはなれていないのに、歩いて行ける距離なのに、決定的に隔てられてしまっている。国際空港とはそういう場所だった。
最後に悠大と都子が大きく手を振る。悠斗と雛子も振り返す。やがて、両親の姿は他の乗客たちの群れに紛れて見えなくなっていった。
「雛子、ここは屋上の展望デッキから送迎が出来るから、そこから見送ろう」
「ん……。わかった。おにいちゃんがそう言うなら、そうする」
エレベーターとエスカレーターを何度か乗り換えて、送迎デッキに出る。両親の乗る飛行機はすぐに見つかった。まだ様々な車両が飛行機の周りで作業をしており、離陸までは結構な時間がかかりそうだ。
「出発時間、何時だっけ？」
「一七時五〇分だったと思う」
「そうか。あと三〇分くらいかな。飛行機の出発時間ってのは、駐機場を出る時間だから、滑走路までいって離陸するのはもっと後だ」
「うん……。でも、ちゃんと見送ろう、おにいちゃん」
「分かってる。最初からそのつもりだ」
父の全面的な信頼を勝ち取った、悠斗の『雛子は俺が護る』宣言からすでに二週間。もうすでに雛子は妹としての自覚も出来ていて、今までみたいに悠斗にべったりということもなくなってきている。悠斗としてはなんとも寂しい限りなのだが、これも兄としては仕方

のない事だと半ば諦めていた。
　もうすぐ六月になろうかという季節の夕刻、展望デッキには結構な数の見物客がいた。昼間は暑いくらいだったけれど、夕方になって気温も大分落ちている。風も爽やかで、これで飛行機の燃料の匂いが無ければなかなかのデートスポットと言えた。
　やがて、両親を乗せた飛行機の機外作業が終わり、搭乗口から乗客が乗り込んでいくのが見えた。ボーディングブリッジが外され、飛行機がトーイングカーで押し下げられる。同時にエンジンを一基ずつ始動し、誘導路に出る頃には全部のエンジンが廻っていた。
　誘導路を進む飛行機を見つめる雛子に、悠斗が不意に声をかけた。
「雛子、ちょっとこっち向いて」
「なに？　おにいちゃんんっ……」
　振り向いた瞬間を狙ったキスだった。雛子は嫌がるそぶりも見せず、しばらくうっとりと悠斗に身を任せていた。悠斗は唇を離すと、にやっと笑った。
「愛情表現してみました」
「兄妹でキスは変だよ」
「ああ、変だな。でも、雛子は嫌だったか？」
「そんなこと聞くかなぁ」
「嫌だったか？」
「嫌……じゃないよ」
「なら好きなときにすればいいんだ。俺は雛子を護ってやる。どんなことがあっても。この先ずっと」
　展望デッキの手すりの上で、悠斗と雛子の手が触れあう。両親の乗る飛行機が離陸していくのを見送りながら、二人はしっかりと手を握りあっていた。

第一章　――恋人が妹！？――　４（後書き）

いかがでしたか？よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第二章　――従妹、襲来――　1（前書き）

第二章の1をお送りします。
それではどうぞ！

第二章　――従妹、襲来――　1

翌日から、悠斗と雛子の二人だけの生活が始まった。悠斗は心に鍵をかけ、雛子と一線を引くように心がけていたし、雛子は悠斗をすっかり兄として見るようになっていた。ただし、その視点は若干歪んだものだったが。たとえば禁じられた兄妹の愛、とか。

今日も朝から悠斗がキッチンに立って朝食の支度だ。家事などは当番制にして、それぞれが交代でやることにした。朝食と夕食は必ず一緒にとる。これは両親がいたときからの不文律だ。

「あ、雛子、お醤油とって」

「ん……、……！！」

醤油差しを手渡そうとした瞬間、指先と指先がほんの僅か触れた。雛子は思わず手を引いて、醤油差しを落としてしまった。テーブルの上に醤油が小さな水たまりを作る。

「ご、ごめんなさい」

「気にしないでいいよ。このくらいならすぐ綺麗になるし」

にっこりと微笑む悠斗の顔を見て、雛子は胸の鼓動が高まるのを感じていた。妹になりきってはいたものの、やはりそこは血の繋がらない二人である。お互いを異性として意識してしまうのは無理のないことで、ごく健全なことと言えなくもない。

（だめだめ。おにいちゃんはおにいちゃんなんだから。他の男の人とは違うの！）

「雛子、どうした？　少し顔が赤いぞ？　熱でもあるのかな」

不意に悠斗が雛子の額に手を載せる。雛子の顔の赤さはどんどん増していく。

「熱はないみたいだな。でも、もし具合が悪かったらすぐ言うんだぞ？　季節の変わり目だし、体調も崩しやすいからな」

「う、うん……。わかったよ、おにいちゃん」

「そういや、雛子は今日はシャワー浴びないのか？」

「んー。浴びたいけど、今日寝坊しちゃったし……。昨夜はちゃんとお風呂入ってるからいいかなって」
「そうか。んじゃ、俺もそろそろ登校の準備してくるよ」
「うん。わかった」
そうは言ったものの、毎朝シャワーを浴びる習慣がついてた雛子はやはり何となくだが不快だった。悠斗がほんの僅かな体臭に気づいてしまうかもしれない。そんなの、絶対困る！　さっとシャワーを浴びるだけならものの数分もあれば済むだろう。
（よし、やっぱりシャワー浴びてこよう！）
雛子は制服姿のまま浴室へと向かうのだった。

「んー、雛子がシャワー使わないんなら、今日は俺が使わせてもらうかな」
悠斗は制服に着替えようとして、ほんの少し寝汗の匂いがすることに気がついた。これを雛子に気づかれるのはちょっと困る気がする。何となくではあるのだが。悠斗はパジャマのまま制服と下着の替えを持って、浴室へと向かった。

「さて、制服はちゃんと畳んでこっちへ置いてっと。下着はさっき替えたばっかりだから仕方ないとして、シャワーシャワー♪」
浴室の扉を開ける。タイルがひんやりとした感触を足の裏から背中、そして脳へと伝えていく。
「やっぱ朝のお風呂はタイル冷たいよね。まあ仕方ないか」
雛子浴室の扉を閉じた。その瞬間、脱衣場の扉が開かれる。
「シャワー、シャワー♪」
（お、おにいちゃん！？）
なんということだろう。浴室の扉の向こうには兄がいる。それも、どうやらシャワーを浴びる気満々らしい。雛子の制服は皺にならないように脱衣かごとは反対側の棚の上に置いてある。
（わたし大ぴ――――んち！！）

逃げ道などありはしない。あるのは小さな窓だけだが、全裸で脱出するほどの度胸は自分にはない。雛子は天に祈った。どうか兄が自分の存在に気づいてくれますようにと。だが、神は聞き入れてはくれなかった。浴室の反対側に追い詰められるようにして逃げて、精一杯身体を隠す。そこに全裸の兄が扉を開けて入ってきた。

「あ……」

「……――っ！」

ハンドタオルで身体の前面だけを隠した雛子のあられもない姿を見た悠斗は、両の鼻の穴から大量の血を吹き出して、その場で卒倒した。

「おにいちゃん！　おにいちゃん！！　しっかりして！」

悠斗はもうろうとする意識の中で、雛子のしっかり育った乳房を、ああ綺麗な形だな、などとのんきに評価していた。

＊＊＊

何とか悠斗を浴室から救出した雛子は、幸せそうな顔で鼻血をどくどく出す悠斗の鼻の穴にティッシュを丸めて詰め込んでいた。もちろんシャワーはおあずけだ。それどころか、全裸の悠斗に下着を着けさせ、こうして膝枕をしながら介抱している。今日はもう遅刻は確定だ。

「う……。うーん……。はっ！　なんで全裸の雛子が風呂場にいるんだ！！　……あれ？」

「気がついた？　おにいちゃん」

「さっきまで凄くいい夢を見ていた気がする……」

「おにいちゃんのえっち！！」

雛子はソファーに置いてあったクッションを採り上げると、ぼすぼすと悠斗の頭を連打した。そこで悠斗も気づく。自分は確かに脱衣場で全裸になったはずだ。それなのに、今は下着を（下だけだが）つけて、リビングの床で雛子の膝枕で寝そべっている。これらの事

実から導かれる答えは――
「うわぁっ！　俺はもうお婿にいけない！」
「それはこっちのセリフだよ、おにいちゃん。おにいちゃんの、その、あそこが固くなっちゃって、パンツ穿かせるの大変だったんだから！」
　そんなところまで見られていては、ますますお婿にいけないと思う悠斗であった。しかし、見られたのがまだ雛子だったからよかったのかもしれない。他の女に見せるくらいなら、雛子に全裸ダイブする方を悠斗は選ぶ。
「ご、ごめん……」
「悪気がなかったのはわかってるから……」
「じゃあ、許してくれるのか？」
「でも、でも、あれがあんなに大きく固くなるなんて……。保健の授業で習ってたけど、信じられない……」
「その辺は忘れてくださいッ！！」
「忘れられないよぉ……」
「お願いだから忘れてッ！！」
　不毛な会話で時間が経つのをすっかり忘れている二人だったが、壁掛け時計が九時のメロディを流しはじめたところで我に返った。完全に大遅刻である。理由を聞かれてもこんなこと説明出来るわけもない。二人は顔を見合わせて呟いた。
「困った……」
「困ったね……」
　妹（兄）と全裸で風呂場で遭遇しまして、兄の方が鼻血を大量に噴きました。これが遅刻の原因です……。変態と思われるだけだろう。
「いっそ、今日はサボるか」
「おにいちゃん、そうやってサボると癖になるよ？」
「だって雛子、お前だってちゃんと遅刻の理由説明出来るか？　嘘ついてもすぐばれるぞ？」

そう、雛子は嘘をつくとすぐに視線が泳いでしまうのだ。だからこそ正直に素直に生きてこられたのかもしれないが。とりあえずは学校へ連絡しなければならない。この場合兄が病気で妹は看病に残るとした方がいいのだろう。

「じゃあ、わたしが学校に電話するね。電話なら目が泳いでてもわからないし、ある意味これは嘘じゃないから！」

そういって自分を納得させないと、小さな嘘でもつけない小心者の雛子であった。

「あ、もしもし。仁正学園ですか？　わたし一年C組の露木といいます。実は兄が急な病気で倒れまして……。はい、はい。両親もいないのでわたしが看病に残らないといけないんです。はい。担任の先生にお伝えいただけますか？　はい。よろしくお願いします」

携帯の通話ボタンを押して回線を切ると、雛子はふうっと大きく息をついた。

「もう、今日サボったのはおにいちゃんのせいだからねっ！」

「……雛子がそんな綺麗な身体してるからいけないんだ」

「――ッ！！　おにいちゃんのえっち！！」

そんな平和な露木家の日常の風景を、遠くから監視する目があった。ライフルのようなビデオカメラと超高倍率のレンズ。耳には以前仕掛けておいた盗聴器からの音声を再生する為のイヤフォン。直線距離にして五〇〇メートルほど離れた高層マンションの屋上で、その少女は事の一部始終を目撃していた。

「いつの間にあんな女が……。おにいちゃん、待っててね。必ず助け出すから」

＊＊＊

しかし、平日に学校をサボってしまうと、普通の生徒には大変退屈な一日が待っている。外に遊びに出るわけにもいかず、家の中で

趣味の合わない主婦向けのワイドショーを見るか、大して興味もないし意味もよくわからない国会中継をみるか、その程度の選択肢しかないのだ。

そして、悠斗と雛子も退屈していた。どのくらい退屈かというと、変装して街に繰り出すことを本気で考えはじめるくらいには退屈していたのだ。ただ、それは悠斗の「補導されて不良のレッテルを貼られるぞ」の一言で却下されていたが。

「うー、退屈だよぉ……」

「仕方ないだろ、今日は一日こうして過ごすしかないんだから」

その時だった。悠斗は何か違和感を感じていた。何なのかははっきり分からない。だが『なにかがいる』ような気がしてならない。こんなことを雛子に言うと、オカルト関係が大の苦手の雛子のことである。裸足で家を出て逃げかねない。しかし、確かに何者かの気配がするのだ。

悠斗はまず室内で様子のおかしいところはないかを見まわした。大丈夫。特に変なところはない。この居間に限ってだが。では玄関はどうだ？

「あ、新聞取り忘れてた。ちょっと取ってくるな」

雛子に余計な心配をかけないために、悠斗はそう言って席を立った。雛子は総理大臣が野党の追及をのらりくらりと躱し続ける国会中継に見入っている。これなら二階も見てこれるだろう。

二階の自室と父母の寝室、そして雛子の部屋も確認する。怪しいものはなにもいない。だが、気配はより濃厚になっている。これは一体何がいるというのだ？　悠斗は背筋に冷たい物が伝うのを感じていた。

「ん？　おにいちゃん、ずいぶん遅かったね」

「ああ、ちょっと自分の部屋に戻ってた」

そう言いつつソファーの雛子の隣に腰を下ろす。一瞬、殺気にも似た気配がその濃さを増す。なんなのだ、これは。ふと、悠斗は庭の植え込みの様子が前と少し違うような気がした。あそこの部分、

あんなに茂っていただろうか？　疑いは確信になり、悠斗は居間の窓を開いて庭に出た。
「おい！　いるのは分かってるんだ！　一体何者だ！」
しかし、その不自然な茂みは全く動くことはなかった。
「そこにいるのは分かっている！　出てこないと警察を呼ぶぞ！　五つ数える。その間に立ち上がれ。一つ……二つ……三つ……四つ……五つ！」
カウントが五になると同時に、その不自然な茂みがごそりと動いた。そして、それは人の形を取って立ち上がった。まるで全身を植物で覆われたようなその姿は、映画に出てくるモンスターのようだった。だがそうではない。これは――
「ふん、ギリースーツか。よくできてはいるが、こんな至近距離じゃ流石にばれるぞ。どれ、正体を見せてもらおうか！」
悠斗の手でギリースーツを着た侵入者はみるみるその正体を露わにしていく。身長はどうみても雛子と変わらない程度。長い黒髪。ギリースーツの下には黒いゴスロリのドレス。そしてなによりその顔に、悠斗は嫌と言うほど見覚えがあった。
「ゆ……柚希（ゆずき）……なのか？」
「……おにいちゃん……おにいちゃんっ！！」
ギリースーツの下から出てきた少女は、涙を目にためながら悠斗に抱きついてきた。その少女は露木柚希、悠斗の従妹である。叔父のところの娘で、小さい頃から悠斗を実の兄のように慕っていた。だが、中学に上がってから陰湿ないじめに遭い、不登校になっていると悠斗は聞いていた。その柚希がなぜこの街に？
「柚希ね、柚希ね、とってもおにいちゃんに逢いたかったの。だからコッソリ盗んだバイクで走り出して、隣町から長距離バスにのってこの街に来たの。でね、お父さんの趣味のサバイバルゲーム用のギリースーツを着込んで、庭に陣取ってたの。そしたらね、あの女がおにいちゃんとイチャイチャしてるじゃない！　これって一体どういうこと！？　おにいちゃんには柚希という心に決めた相手がい

たんじゃなかったの？　なんで他の女を家に入れてるの～～～～！！」

もうメチャクチャである。泣き出した柚希をとりあえず部屋に入れながら、悠斗は「これでご近所の評判は一気に下がるな」と予感していた。事実、何事かと聞き耳を立てる奥様連中が多々いるのである。

柚希は部屋に入ってからも全く泣き止む様子がない。とりあえずと言うことで雛子が出してやったお茶にも一切口をつけない。

「そんな女の入れたお茶なんて、穢らわしくて柚希飲めないわ」

「おにいちゃん、この子……だれ？」

「ああ、雛子は初めて会うんだったな。叔父さんの娘さんで、名前は柚希。俺たちの従妹だ」

「俺『たち』の！？　それは一体どういう意味、おにいちゃん！？」

悠斗はこの二週間ほどの経過をかいつまんで柚希に説明してやった。柚希の顔がだんだんと蒼くなっていく。

「つまり、この女は、おにいちゃんの戸籍上の『妹』なのね？」

「そういうことだ。だから柚希も仲良くしてやってく……」

「イヤよッ！！」

柚希は全身で嫌悪を示していた。何でこんな女と自分が仲良くしなければならないのか、そう訴えていた。

「おにいちゃんは、柚希のおにいちゃんでしょ？　柚希よりこんな女を選ぶっていうの？」

「こんな女なんて言うなよ。雛子は俺の大事な……」

「大事な、なによ」

妹だと言い切ってしまえば柚希も納得するのだろう。だが、悠斗には何故かそれが出来なかった。妹として接して来て、もう二週間以上も経つのに。

「ふん、なーんだ。ちゃんと関係も言えないような間柄なんだ。それなら柚希の敵じゃないわよね。『戸籍上の妹』さん、私は露木柚希。ご覧の通り、おにいちゃんの大切な従妹よ！」

「柚希ちゃんですね？　わたし、おにいちゃんの『妹』の露木雛子です。よろしくね」
「なれ合うつもりは無いわ！　柚希は必ずあなたの手からおにいちゃんを救い出してみせるんだから！」
悠斗は目眩を感じて、その場にへたり込んでしまった。

第二章　――従妹、襲来――　1（後書き）

いかがでしたか？　よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

第二章　――従妹、襲来――　2（前書き）

第二章の2をお送りします。
それではどうぞ！

第二章　――従妹、襲来――　2

悠斗は柚希の家に連絡を入れた。電話に出た叔父は済まなさそうに柚希を頼むと繰り返すのみだった。
「いやね、悠斗君。柚希ったら昔っから君になついてたじゃないか。どうか頼むよ。しばらくの間、柚希をそっちに置いてやってくれないか」
「叔父さん！」
「とにかく、柚希はしばらく君に預けるから。君なら間違いも起こさないだろうし」
「叔父さんは僕をなんだと思ってるんですか！？　年頃の男ですよ！？　今うちに親がいない事は叔父さんだって知ってるでしょうに！」
叔父はそれでも引き下がらない。何とかして柚希の引きこもりを治したい一心なのだろう。
「頼むよ。柚希の生活費は当然こちらでもつから。昔みたいに遊んでやってくれ。それじゃあ、頼んだよ！」
がちゃん。つー、つー、つー……。
「なんて叔父さんだ……」
「ね？　柚希の言った通りでしょ？　だから、おにいちゃんは安心して柚希を預かってくれていいの。もちろん、柚希にあんなことやこんなこともしていいのよ？　お父さんはダメだっていってたけど、柚希が許しちゃう！」
悠斗は顔を真っ赤にして怒鳴った。
「なんだその『あんなことやこんなこと』ってのは！　俺には柚希にそんなことをするつもりは一切ない！」
その言葉を聞くと、柚希は大きな瞳に涙をため、ぽろぽろとこぼしはじめた。慌てて柚希をなだめようとするが、柚希の涙は止まらない。しゃくり上げる声も大きくなり。またさっきと同じように大

声で泣き出してしまった。
「おにいちゃんは柚希が可愛くないの！？　そんな女の方がいいって言うの！？　いいわよ、柚希、電車に飛び込んで死んじゃうから！　その方がおにいちゃんもせいせいするでしょ！　止めても無駄なんだからぁっ！」
　手脚をじたばたさせて、全く手がつけられない。悠斗は頭を抱えて、やるかたなしといった感じで首を振った。柚希は昔はもっとおとなしい女の子だったはずだ。最後に会ったのは柚希が小学六年の夏休みだから、三年前になる。この三年間で一体彼女に何が起きたのか。悠斗は口ではきついことをいいながらも、やはり幼い頃から良く知っているはずの柚希の変貌を心から心配していた。
　なにしろ登場の仕方からしておかしいのだ。ギリースーツというのは、戦場で狙撃兵が茂みなどに隠れるときに使う偽装服だ。植物そっくりで、遠目にはまったく本物の茂みと見分けがつかない。そんなものを叔父さんが持っていたのも驚きだが、それを使って庭に忍び込もうなんて考える柚希の思考回路もまた驚きだった。聞けば、家でも毎日パソコンに向かってなにやらブツブツいいながらキーボードを叩いていたらしい。
（不健全だ。まったくもって不健全だ。中三の女の子がそんなことでどうする。仕方ない、叔父さんのいうとおり、しばらくの間うちで預かるか）
　それが柚希の張った巧妙な罠であるとも知らずに、悠斗は柚希を家で預かることを決めてしまっていた。
「わかった。柚希、お前はしばらくうちにいていい。引き籠もってばかりいるよりは何倍もましだろうからな。ただし！」
　悠斗はそこで言葉を切ると、すっと大きく息を吸い込み、より大きな声ではっきりと柚希に告げた。
「万一雛子になにか変なことを仕掛けたら、即家に送り返すからそのつもりで！　いいね？」
「はーい！　柚希いい子だからそんなことしないもん！」

「どの口でほざいてやがりますか、この引きこもり娘は……」
「ん？　なにか言った、おにいちゃん？」
「あー、何でもない！　とにかくだ。今日は一日家で過ごせ。実は今日俺たちは学校を休んでいる」
　柚希がそう言えば、といった表情で首をかしげる。
「今日って平日だよね？　なんで学校休んでるの？」
「ううっ……。そ、それは……」
　にやりと柚希が笑う。その瞳は「なんでもお見通しだ」と言わんばかりに輝いている。悠斗はその柚希の目を見て、何故か背筋に冷たい物が走ったような気がした。
「柚希知ってるもーん。おにいちゃんとそこの女が朝から素っ裸で風呂から出てくるところ見てたから。うわぁ、いやらしい。とんでもない女よね。人のおにいちゃんを取るだけじゃなくて、色仕掛けまで仕掛けるなんて！　柚希信じられなーい！」
　なぜ柚希がそんなことを知っている？　悠斗は正直焦っていた。一体どこから見ていたと言うのだろうか。塀のおかげでお隣さんなどからは居間の中はみえないし、お隣さんの二階の窓は雨戸が閉まったままだ。と、悠斗の目に一つの建物が目に入った。直線距離で五〇〇メートルほどは離れているだろうか、ちょっとした高層マンションだ。この部屋を覗くには絶好のポジションである。しかし、まさか？
「スナイパー柚希ちゃんを舐めないで欲しいわ。狙った情報は即ゲット。どんなに隠そうとしても、この柚希ちゃんの目からは逃れられない。それがたとえおにいちゃんのひとりえっむぐぅっ！！」
　これ以上喋らせては危険だ。雛子にも教育上よろしくない。そう判断した悠斗は、柚希の口を無理やり塞いでずるずると自分の部屋に引きずっていった。ひとり居間に残された雛子は、まるで嵐が去った後の被災者のような表情で呆然としていた。
「……なんか、凄い子だったなぁ……」

＊＊＊

自室にまで柚希を引きずり込んだ悠斗は、そこでやっと柚希の口を放してやった。柚希はといえば、涙目で何かを言いたがっている。

「まあとにかく座れ」

柚希はベッドサイドにそっと腰掛けてそのまま横になろうとする。悠斗は頭から湯気を出しそうな勢いで怒鳴った。

「そうじゃなくて！　床に正座しなさい！」

「えー、柚希、正座ってきらーい。足が短くなっちゃう」

「そんなことはないから、とにかく正座！」

ブツブツと文句をいいながらも、一応悠斗の言うことに従う柚希だった。これでとりあえずお説教モードに入る事が出来る。悠斗はようやくほっとした。だが、相手は三年前の素直な柚希ではない。この三年間で歪みきった柚希である。

「いいか、柚希。朝のあれはな、事故だ。そう、不幸な事故なんだ。だいたいなんだ？　あれを見ていたということは、あそこのマンションの上からでも見ない限り無理じゃないか！　なんでそんな非常識なことを」

「ちっちっちっ。おにいちゃん、自分の常識だけが世間の常識だと思っちゃダメよ。柚希には柚希の常識があるの。柚希はそれに従って行動しているだけ。誰にも恥じることはないわ」

「世間一般の常識を『常識』っていうんだよ！　柚希がいってるのは『自分ルール』ってやつであって、常識じゃない！」

「じゃあ、その世間一般の常識っていうのを柚希に教えて。か・ら・だ・で（はーと）」

正座していた足を崩し、黒のゴスロリドレスの裾から、白い太腿を悠斗に見せつける。黒のスカートと白い肌のコントラストが眩しい。大体、この柚希という少女は黙って座っていればとんでもない美少女なのだ。すらりと伸びた手脚。スレンダーな体つき、小ぶりな顔に精緻の極みを尽くしたような目鼻立ち。それがわざとスカー

トの裾をめくりあげて悠斗を誘惑しようとしている。
「だから！　そういうのをやめなさいって言ってるの！　誰に習ったんだそんなこと！」
「え？　ネットのえっちなサイトだよ？」
「ああいうところは子供は行っちゃダメでしょ！」
頭痛のする頭を抱えながら、悠斗はさっきの決断は早計過ぎたんじゃないかと思いはじめていた。悠斗のなかの柚希のイメージは、可愛らしくて、素直で、大人しくて、とても頭のいい少女だった。だが、目の前の柚希はどうだ？　引きこもりが過ぎるとこうも人格が歪んでしまうのだろうか。
「とりあえずだ。当分の間うちで預かるというのはいい。叔父さんにも頼まれちゃったしな。でもな、柚希。いつかは家に帰らなきゃならないんだぞ？　それはちゃんと分かってるだろうな？」
「うん！　柚希ちゃんと分かってるよ！　その時はおにいちゃんも一緒にお父さんとお母さんにあいさつに来てね」
「全然分かってないじゃないか！　俺は、柚希をそういう対象に見てない！　そりゃ柚希は可愛い従妹だけど、それとこれとは話が別だ！」
「ううっ……、後から抱きすくめて部屋に引きずり込んだくせに……」
「それは柚希がろくでもないこと言うからだろ！　いいか？　とにかく柚希は雛子に手を出すな！　あいつは俺の、俺の……」
「『俺の』……なに？」
「……っ！　な、何でもいいだろ！　とにかく柚希は雛子にちょっかい出すな。いいな！」
悠斗が扉を開けて部屋を出ようとすると、外では雛子が壁に耳をつけて中の様子を窺っていた。慌てて居住まいを正すが、何をしていたのかは一目瞭然である。
「何してんの、雛子？」
「え……、んー……敵情視察？」

「なんだそりゃ。とりあえず居間に戻ろう。そろそろ昼だからな。何か軽く食べるものでも用意するよ」
「え？　いいよいいよ。おにいちゃん朝作ってくれたじゃない」
「これは柚希の出番ね！」
二人の間に柚希が割り込んで仁王立ちしていた。右手はぐっと拳を握って、目には炎を燃やしている。大昔のスポ根アニメみたいだ。
「出番って、柚希、料理なんて出来るのか？」
「カップ麺にお湯を注ぐことは得意よ？」
「そんなんじゃなくて！　ちゃんとした料理が出来るのかって聞いてるんだ！」
「失礼ね。柚希引き籠もってたから、昼はいつも自分で作ってたわよ。チャーハンぐらいならすぐ作れるわ」
チャーハンなら自分にも作れるという言葉をぐっと飲み込んで、悠斗は目の前の超絶美少女である従妹を見下ろした。身長差がかなりあるので、柚希はあごを心持ち上に上げて、上目遣いに悠斗を見上げてくる。その目には自信が満ちあふれていた。これならまあ任せてもいいか。悠斗はそう判断した。
「じゃあ、昼は柚希に作ってもらおう。俺たちは居間でテレビでも見て待ってるから」
「はいはーい！　柚希ちゃん特製のチャーハンを待っててね」
柚希のその軽いノリの返事に、何となく嫌な予感のする悠斗であった。

＊＊＊

予想に反して柚希の料理の手際はとてもよかった。いつも昼を自分で作ってるという言葉に嘘はないようだ。悠斗はこれなら任せて大丈夫だろう、とキッチンから居間のソファーに戻ってきた。
「どうだった、おにいちゃん？」
「うん。手際はかなりいい。作りなれてるって感じだったな」

「そっか。わたしも負けてられないなぁ」
両の拳を胸の前でぐっと握る雛子。そんな仕草もとても可愛く見えて、悠斗の頬は緩みっぱなしだ。そんな二人を尻目に、柚希はある企みを実行に移そうとしていた。
腰につけたポーチから小さな小瓶を取り出すと、皿に盛る前の一杯分のチャーハンにこれでもかと振りかける。
「ん？　なんだ、この匂い？」
「え？　なんのことかしら。柚希には普通のチャーハンの匂いしかしないけど？」
「うーん、まあ、食べ物の匂いだからそんなに気にする事ないか」
柚希は密かにガッツポーズをしていた。柚希の持っていた小瓶の正体は、間もなく明らかになる。三杯分のチャーハンを作り終え、柚希はダイニングテーブルに皿を運んだ。
「はーい！　柚希ちゃん特製のチャーハンの出来上がりですよー！」
柚希の作ったチャーハンは、見た目にはとても美味しそうである。これと言った特徴もないのだが、ごく普通に作られた家で作るチャーハンだ。だが、悠斗はとても、とても嫌な予感を抱えていた。そして、その予感はおそらくは正しい。
「柚希、お前のチャーハンと雛子のチャーハン、取り替えてくれないか？」
「えっ！　……な、なんで？」
「特に理由はない。なんだ？同じものなのに取り替えられないのか？」
顔にびっしりと脂汗を浮かべる柚希。心なしか全身が震えているようにも見える。これはビンゴだ。悠斗はそう確信した。これは絶対になにか仕掛けがあるに違いない。悠斗は追い打ちをかける。
「雛子の方が少しだけ量が多いんだ。雛子はちょっと小食でさ。その量だとちょっと多すぎると思うんだよな。だから、取り替えてくれないか」
悠斗の真剣なまなざしが柚希の瞳を射貫く。今やその震えは端か

ら見ていてもはっきりと分かるほどで、テーブルに置かれたタンブラーに注がれた麦茶の表面がさざ波を立てているほどだ。
「どうなんだ？　取り替えられない理由でもあるのか？」
「わ、わかったわよ！　取り替えればいいんでしょ！　はい！」
柚希は乱暴に皿を雛子の方につきだしてきた。雛子はそっと自分の皿を柚希の方へ差しだす。自分の方へ廻ってきた皿を見て、だらだらと汗を流す柚希に、悠斗は満面の笑みで言った。
「さあ、露木家の食事は家族揃ってが基本だ。では、いただきます」
「いただきます」
「い、いただき……ます」
悠斗と雛子の二人はごく普通に食べ始めた。味もごく普通。当たり前のチャーハンの味だ。だが、作った本人の柚希は一向に手をつけようとしない。
「どうした？　柚希、さっきから全然食べてないじゃないか」
「お、おほほほほほ！　そんなことはないわ！　ほら、この通り！」
スプーンの先に米粒をほんのちょっと載せて、柚希は口に運んだ。次の瞬間、柚希の前にあったタンブラーの中の麦茶は空になっていた。急いで継ぎ足す湯月に向かって、悠斗の容赦のない声が飛ぶ。
「そんなちびちび食べてたらいつまで経っても食べ終わらないぞ？　もっとこう、がばっと食べろよ。柚希は昔からよく食べる子だったじゃないか」
「ううっ……。わ、わかりました！　柚希、逝きます！！」
なんだかセリフの漢字が不吉なのは仕様なので気にしないで欲しい。ともかく、柚希はスプーン一杯のチャーハンを掬って、それを自分の口の前まで運ぶと、震える手で口の中に放り込んだ。
見る間に柚希の顔が真っ赤になっていく。そう、まるで『唐辛子』でも丸かじりしたかのように。
「やっぱり何か仕込んでたか……。柚希、怒らないから仕込んだものを出しなさい」
やっとの思いでチャーハンを飲み込み、ごくごくと麦茶を流し込

んでいた柚希だったが、悠斗の言葉に身を固くした。怒らないから出しなさい、と言われて正直に出したらきっと怒られるに違いないのだ。だが、悠斗はじっと柚希の瞳を見つめ続けている。嘘は絶対許さないという、確固たる信念がそこにはあった。

「ばれてしまっては仕方ないですね。これです……」

ことん、という音と共にテーブルの上に置かれたのは、一部の辛い物好きの間では有名な『死のソース』だった。それが半分ほどなくなっている。

「これ、どれだけかけたんだ？」

「一気に半分ほど……」

悠斗は呆れ果てたと言う様子でため息をついた。まあ、策士策に溺れるというところなのだが、自分の作った『死のチャーハン』を前に涙目になっている柚希をこれ以上強く叱る気にもなれない悠斗だった。

「ふぅ……。とりあえず柚希はこれ食べてろ。俺は自分でなんか作るから。流石に『死のチャーハン』は捨てざるを得ないだろうからな」

二口ほど食べた自分のチャーハンを柚希に差しだした悠斗は、『死のチャーハン』の皿を持ってキッチンに向かった。生ゴミの中にそれを捨てるとき、思わず心の中で「お百姓さんごめんなさい」などと呟いてしまう。ご飯はまだチャーハン一杯分ほどは残っている。

「じゃあ、格の違いってヤツを見せてやるか！」

悠斗は中華鍋を取り出すと、腕まくりをしてエプロンを着けるのだった。

第二章　――従妹、襲来――　2（後書き）

いかがでしたか？　よろしければご意見ご感想などお寄せ下さい。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n6259y/

お義兄ちゃんとよばないでっ！

2011年11月23日19時53分発行